

42320

教科書文庫

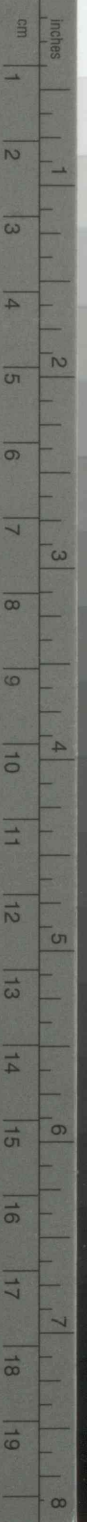
4
810
42-1934
00030/82/

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

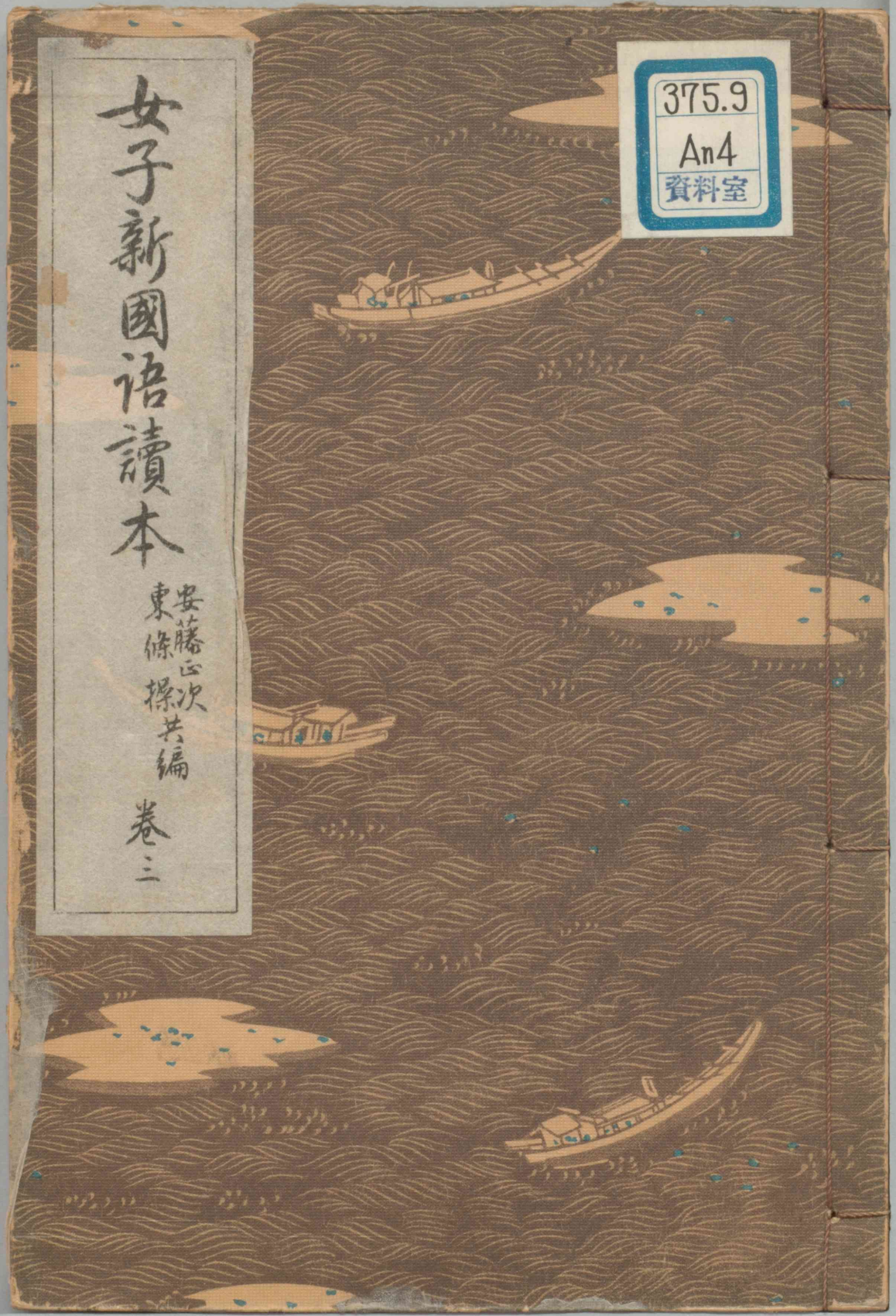
© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
An4
資料室

女子新國語讀本

安藤正次
東條操 共編
卷三



375.9
Am4

資料室

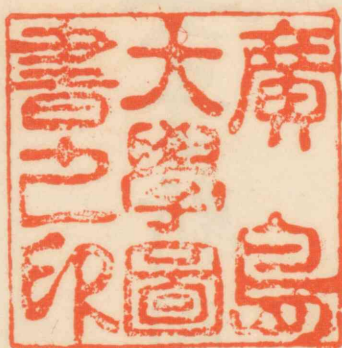
日十二月一年九和昭
濟定檢省部文
用科語國校學女等高

臺北帝國大學教授
安藤正次
學智院教授
東條操
共編

女子新國語讀本
卷三

株式會社 三省堂

資料室



(照參課四十第)

物 植 山 高

卷三 目次

一	桃
二	花影の中に
三	小楠公(詩)
四	老僧の接木
五	潮待つ間
六	たんぼ
七	窓

島崎藤村	一
田山花袋	二〇
西條八十	二七
室鳩巢	三〇
幸田露伴	三三
若山牧水	三六
土岐善麿	三五

目次

一



八	自然の音楽	鈴木鼓村	四
一	野の曲		
二	瀑の音		
九	国歌の話	田邊尙雄	四
一〇	麥秋の頃	徳富蘆花	五
一一	私の村(詩)	尾崎喜八	六
一二	味はひある生活	下田次郎	六
一三	世界三都の印象	鶴見祐輔	七
一四	山の感觸	黒田初子	八
一五	お花畠	北尾鏡之助	六

一六	一樹の陰	海上龍子	一〇
一七	知らぬ火	橘南谿	一五
一八	涼み臺	吉村冬彦	一四
一九	誠といふ説	三浦梅園	一三
二〇	蟲の音と秋草	高濱虚子	一〇
二一	雑草	相馬御風	一四
二二	千代女	佐々政一	一四
二三	牛を追ふ話	五十嵐力	一五
二四	稗草の穂(短歌)	諸家	一三

二五 國風と家風

徳富蘇峰 一五

二六 トロッコ

芥川龍之介 一六

— 目次 終 —



女子新國語讀本 卷三

島崎藤村
名は春樹。詩人。
小説家。長野縣の
人。明治五年生。

一 桃

島崎藤村

三月の桃の節供は、五月の菖蒲の節供と共に、一年のうち
のあらゆる祭の日の中でも私達に特別の親しみを覺えさせる。
それは季節の感じが深いといふばかりでなく、子供のための
祝の日であるからであります。最早この世に居ない身内の人達
の形見として残つたやうな古い雛などの取出されるのも、さういふ
日だ。幼いもの

はその日を迎へて、自分等の生長を楽しみ、大人はその日を迎へて、自分等の少年時代をなつかしむ。

白酒ひしもち桃の花の掛物、三月の節供を祝ふもので



(筆叟梅村松) 句節の桃

一としておとぎ話の情調を誘はないものはない。今にも合唱でも始めさうな雛、古風な少年音楽隊のやうな五人ばやし、そこにある一切のものがみな玩具だ。童話と童謡との世界のものばかりだ。あれは自分等の國にのみあるやうな子供の祭かも知れない。でも、優しい風俗だと思ふ。あ

の節供を祝ふ豆いりの種にも、紅と白とがあつて、桃のつぼみのやうに見えるのもよい。



五月の菖蒲が、男の兒に適はしいやうに、桃の花は自ら少女に適はしい。長い花房をうなだれ、花瓣の胸をひろげて、物思ひに沈んだやうな

海棠のすがたは、到底少女のものではない。茶色でやゝ紅味を帯びた枝の素生に堅くつけたあの桃の花の頸こそ少女のものだ。二尺にも三尺にも及ぶ程、勢ひ込んで延びて来て居るやうなその素生を見たばかりでも、生ひ

連翹



先こもる少女の生命を思はせるものがある。素朴にふぐらんだところは、河柳の野趣に似て、もつと羞らひを含み、しかも處女らしい誇を見せて居るものは桃の蕾だ。

長い冬を通り越して、黃梅・福壽草・連翹などの季節も過ぎ去り、梅には既に遅く、櫻にはまだ早いといふ頃に、桃の春が来る。ぽつ／＼暖かい雨がやつて来て、草の芽を延すころの楽しさは、何に譬へやうもない。長い冬の眠りから眼を覺して、また「生命」の蟲が這ひ出すのもその頃だ。一雨毎に春の來るやうな氣のするのもその頃だ。全く桃の花の樂しさは、櫻や牡丹のやうに私達を酔はしてしまはないで、寧ろ春先の蘇生の思ひを與へるやうなところから來る。

我が衣に云々
芭蕉の句。

任口上人
伏見西岸寺の僧。
貞享二年(三四五)
歿。

ろから來る。冷たく無關心になつてしまつた私達の心を温めて、少女の春を思はせるやうなところから來る。

我が衣に伏見の桃の雫せよ

桃に寄せて、こんなやさしい感情をいひあらはして見せた昔の人すらもある。桃のしづくは果してどんな衣を染めたらう。これは可憐な婦人の身につける襦袢の袖にでもうつりさうなものである。ところがこの處女のやうな感情は伏見の西岸寺といふところで、任口上人といふ人に會つた時の、昔の詩人の心胸から溢れて來て居るのだからゆかしい。

かつて遠い船旅に上つて、上海の港に寄つたことがあ

李鴻章
清國の直隸總督兼
北洋大臣。光緒二
十七年(西紀一八五
〇)歿。

つた。古河公司の人に案内されて、佛蘭西租界の方まで
辻馬車を驅り、支那風な庭園で知られた愚園といふとこ
ろにもしばらく時を送り、それから李鴻章の故廟の跡を
訪ねた。革命後の民國には、李鴻章の銅像も用のない遺
物のやうに、小高い築山の上に引倒してあつた。一代の
榮華は見る影もない。そこいらの廢れた庭園の有様は、
まるで夢の跡だつた。たゞ故廟の建築物などに、在りし
日の面影をとゞめて居た。その建築物も學校に代用さ
れて居るとかで、支那風な瓦屋根や特色のある窓や、白い
壁などが昔を語り顔にそこに残つて居た。そんな破壊
の動いて行つた跡にも、紅い桃の花の今を盛りと廢園の

マルセイユ
佛蘭西南部の港市
リヨン灣に臨む。

リモージュ
佛蘭西中部の都
會。

一隅に咲き出て居るのが眼についた。あの桃の花ほど
上海での旅の感じを深くさせたものはなかつた。
支那より西の方の桃のことは知らない。マルセイユ
の港は地中海に沿うたところで、氣候も我が國と大差の
ないやうに思はれたが、その植物園にも桃は見かけな
かつた。春が來て、巴里の街路にマロニエの花が咲く毎
に、在留する美術家などと連れ立つては、あの都の郊外へ
よく出掛けたものだ。
併し、櫻桃のそこゝに咲いたのはよく眼についたが、
三年の旅の間、つひぞ桃の花を見かけなかつた。佛蘭西
中部のリモージュまで旅して行つた時に桃の木を見たや

うな氣もするが、それもはつきりしたことはない。今でも私はあの果樹の多い佛蘭西の田舎家の裏庭を、そこに熟しかけて居た佛蘭西風の青い梨を、あり／＼と胸に浮かべることは出来る。それほど梨の記憶はあるが、どうも桃のことは残つて居ない。

桃は、殊にその花を愛することは、全く東洋の方の趣味のやうな心持もする。よし佛蘭西あたりの田舎にあるとしても、自分等の國に見ると同じやうな花から、あの春の焔が流れて来るやうなものかどうかは、ちよつと想像がつかない。桃は葉も好ましい。あの細長い葉の尖つたのは、何ともいつて見やうのない生氣を感じさせる。

茂り重なつた葉の間に、小さな珠のやうな青い實をつける頃もよい。氣のあつた友達とでも連れ立つて、やゝ疲れた時に、小鳥の囀る聲でも聞きながら、靜かに歩いて見たいのは、桃の葉かげだ。

桃で思ひ出した。信州の山の上にある守山といふところは、佐久地方でも桃畑で知られて居る。小諸からあの守山までの道にはいゝ木陰もあつて、日歸りにそこを歩いた時のことも忘れられない。青い桃の葉をかぎ、枝に熟した水蜜桃の香氣をかぎ廻つた後でも、ぎたての果實からしづくの滴るやうなのを、桃畑の中の小屋で味はつた時のことも忘れられない。

(藤村女子讀本)

佐久地方
長野縣北佐久郡
小諸
同郡小諸町。

田山花袋
名は録彌。小説家。
群馬縣の人。昭和
五年歿。年六十。

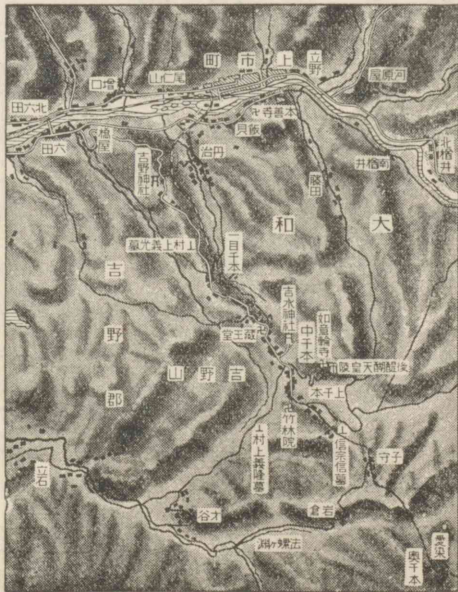
六田
奈良縣吉野郡吉野
村の字。

柳の渡し
北六田と吉野村六
田との間の渡し。

二 花影の中に

田山花袋

金剛山を越えて、吉野の六田の渡しを渡つたのは、その日の午後四時少し過ぎた頃であつたが、途中、花を挿して歸つて来る人に聞いて見ると、花は今眞盛りで、今日早くても遅くても、満開を見る事は出来ないとの話であつた。漸く六田の柳の渡しのほとりに來た頃は、夕日



沈まう
吉野川
紀の川の上流。

歌書よりも
軍書に

かなしい

吉野山

(太平記)

がもう彼方の山の凹處に沈まうとして、清い速い吉野川の流は、きら〜と美しい波紋を川の面に描いて居た。自分は船が前岸に着くと、そのまゝ急いで飛びおりて、一直線にその懐かしい吉野山へと志した。街のはづれに一つの黒い門があつて、こゝから奥の院まで六十町餘りと書いた札が立つてゐるが、それをくゞると、もう山で、櫻の花が段々路の兩側に見え出して來る。入口は盛りが過ぎて、花びらの枝に残つて居るのも極めて少いが、次第に登れば登るほど、花は眞盛りであつて、四邊の眺望の美しさは、殆ど言葉にも筆にも盡くす事が出來ないほどである。右手には、越えて來た金剛山が偉丈

聳えて

十津川
熊野川の上流。

夫の端坐してゐるやうに聳えてゐて、それを仰ぐと、護良親王が十津川からこの地に入つて、千早赤坂と共に三足鼎立の勢を作らせ給うた時の事などが、すぐ胸をついて浮かんで来る。

両側の花はいよ／＼美しい。自分は行く／＼右と左との大澤を見おろしながら、夕日の花やかな光のぼつと谷間々々の櫻花の上に匂ひ混るのを見て、獨りつく／＼とこの山の景のいかに懐古の情を起すに適して居るかを思つた。花も好い、境も好い、山も面白い。けれども吉野朝の遺跡が無かつたら、決してこれほどの感興を起す事はなかつたらう。

村上彦四郎

護良親王に従つて十津川より吉野に入り、元弘三年(一九三)親王に代つて戦死した。

片岡八郎

護良親王に従つて、元弘二年(一九二)元弘三年(一九三)十津川玉置山で戦死した。

玉置山

奈良縣吉野郡十津川村にある。

恢復—回復

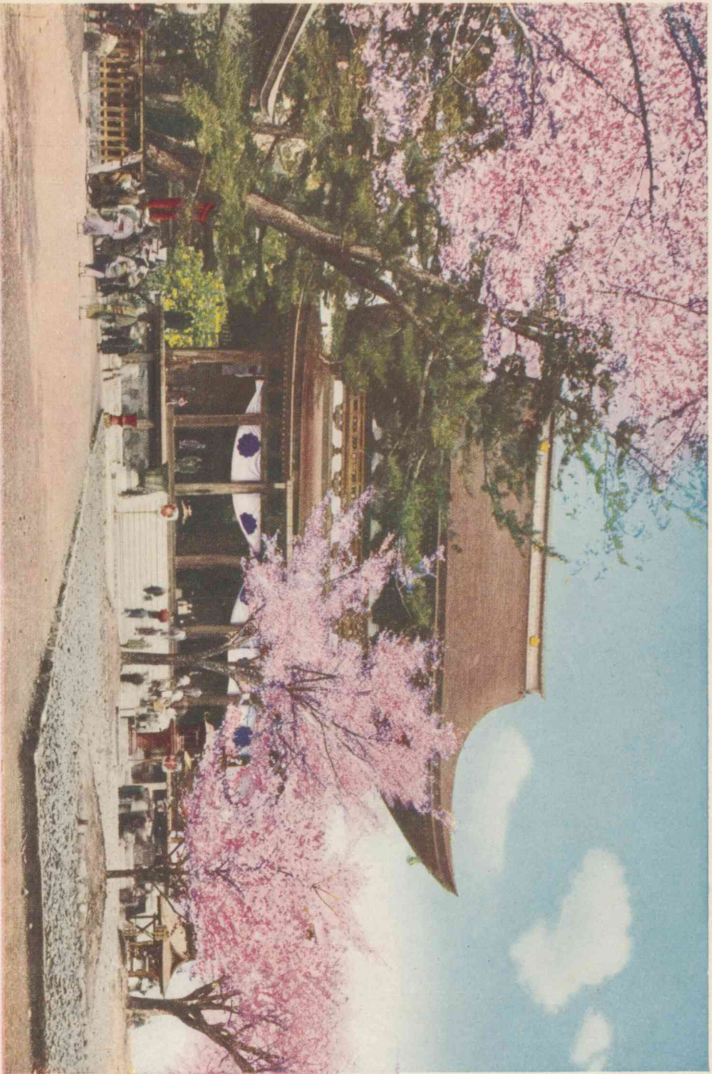
村上彦四郎義光よしてるの墓の前にひざまづいた時は、自分は何とも知れぬ懐古の感に打たれて、暫しはそこを立去る事が出来なかつた。前には片岡八郎があつて、親王の難を玉置山に救ひまゐらせ、後にはこの彦四郎義光があつて、身を以てこの吉野の遁口を安全に守りまゐらせたのであるが、若し後年に至るまで、この忠勇無二の義光が生きて居たならば、親王は決して鎌倉に於てはかない最後を遂げさせ給ふやうな事はなく、或は吉野朝の衰へたのを恢復する事が出来たかも知れない。つたないのは吉野朝の運命である。

この時である。自分の立つて居る傍を、一群の醉客が

憤 填 噴

踏々跟々として歩いて來たが、卑しい歌を唱ひながら、遠慮もなしに、自分の肩をかすめるやうにして過ぎて行つた。自分はすでにこの山に登つた時から、心もない花見客のわい／＼と酒に酔つて歩くさまを、非常に快からず思つてゐたが、今は丁度自分の心が無限の感慨に打たれてゐる時の事として、一層深く憤慨して、一つ罵倒してやらうかと思ふほど癢に障つた。

けれども、花の穏やかに咲き匂つてゐる間を、一步二歩とたどつて行くと、その癢に障つた念は一種深い／＼悲哀の情に變つて、どうにもかうにもたまらないやうな心地になつて、涙がはら／＼とやつれ果てた旅の衣の袖を



(照会二第)

堂 王 巖 山 攝 早

傳はつて落ちた。そして草莽の孤臣といふ感が胸も狭しと溢れて来て、自分も若しその時代に生まれたならば、たとひ雑兵となつても、この勤王の志を致したであらうにと思つた。

そこから吉野の山奥までは五十町、自分はこの間を、どんな感慨と、どんな涙とを以て行き過ぎたであらうか。

護良親王の奮戦した藏王権現堂の高く櫻花の上に聳えて居るのを仰いでは、どんなに烈しい懐古の情に打たれたであらうか。吉水院の行在所のあとを尋ねては、どんなに深い暗涙に咽んだであらうか。

こゝで、この花の中で、後醍醐天皇は劍を按じておかく

藏王権現堂

役小角の開基。金峯山寺の本堂。

吉水院

元は金峯山寺の僧坊。明治九年吉水神社と改め、後醍醐天皇を祀る。

歌
返らじとかねて思
へば梓弓亡き數に
いる名をぞとゞむ
る。」

れなされたのである。こゝで楠木正行は歌を扉の上に
残り、死を決して敵軍に向つたのである。こゝで吉野朝
五十年の帝業は建てられて、正義といふ精神は赫々とし
て光を日月と争つたのである。そしてその六百年前の
夢のあとには、今もなほ美しい満山の花影の中に、微かに匂
ふばかりに残つてゐるではないか。

これほど美しい詩があらうかと、自分は幾度も思つた。
自分がかういふ風にこの吉野朝の遺跡を處々に見て、一
層深くこれに對する同情の念を増したが、翌日吉野山を
下る時には、幾度となく振返つて、殆ど別れ難い思ひがし
た。

(花袋紀行集)

西條八十
詩人。早稲田大學
教授。東京市の人。
明治二十五年生。

三 小 楠 公

西 條 八 十

父の遺訓を畏みて
河内に籠る十餘年

薰忘れぬ楠木の

若葉に春は來りけり。

朝敵賊軍
黒雲四方に蔓りて
天日晦き世の相

我いまにして起たずんば
我が日本をいかにせん。

残んの雪を踏み分けて
詣づ吉野の行在所
破れし御簾を仰ぐだに
鎧にかかる涙かな。

「汝こそ朕が股肱なれ、
みだりに死をば急ぐなよ。」
額を土に埋めつつ
うけし御誕ぞ有難き。

さらば最後と正行が
かねて覺悟の梓弓、
如意輪堂の板壁に
亡き數にゐる武士の、
名をば刻みて見はるかす
四條畷の廣野原、
明日流さん血にも似て
紅燃ゆる夕陽かな。

室鳩巢

名は直清。徳川幕府の儒官。江戸の人。享保十九年(三
元酉)歿。年七十七。
忍が岡
東京市上野公園の池端。

四 老僧の接木

室

鳩

巢

將軍家
三代將軍家光。
谷中
上野公園の北。

忍が岡のあなた谷中の里に、何がしの院とて一つの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其の住僧を知りてしばしば寺に行きつゝ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人に對ひて、前住の時の事をなん語りしを聞き侍りしに、寛永の頃の事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、徒歩にて此處や彼處御過ぎがてに御覽ましましけるが、此の寺へも思ほえず渡御ありしに、折節其の時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつゝ手づから接木してゐけるが、御供の人々後れ奉りて、御側

に二人三人つき奉りしを、なか／＼やんごとなき御事をば思ひ寄らねば、其のまゝ背きゐたりしを、坊主何事をするぞ。」と仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとほしたなく、接木するよ。」と御いらへ申ししかば、御笑ひありて、老僧が年にて、今接木したりとも、其の木の大きになる迄の命も知れ難し。それにさやうに心を盡くす事の不用なるぞ。」と上意ありしかば、老僧、御身は誰人なれば、かく心なきことを聞ゆるものかな。よく思うて見給へ。今此の木ども接ぎておきなば、後住の代に至りて、何れも大きになりぬべし。然らば林も茂り、寺も黒みなん、我は寺の爲を思うてする事なり。強ちに我が一代に限るべ

御紋
徳川氏の定紋三葉葵。



死しても骨云々
「其ノ言ノ後世ニ立
ツ此ヲ之レ死シテ
朽チズトイフ。」
(國語)

き事かは。」といひしを聞し召して、老僧が申すこそ實にも理なれ。」と御感ありけり。其の程に、御供の人々追々來りつゝ、御紋の御物ども多く集ひしかば、老僧それに心得て、おほきに恐れて奥へ逃げ入りしを、御召し出しありて物など賜りけるとなん。今翁も此の老僧が接木するごとく、古い朽ちぬれども、ある限りは舊學をきはめて、人にも傳へ、書にも残して後世に至りて正學の開くる端にもなり、斯の道の爲に萬一の助となりなば、翁死しても猶生けるが如し。古人の所謂「死しても骨朽ちじ。」といひしこそ、思ひあたり侍れ。聊か我が身の爲に謀るにあらず。諸君も翁が此の意を信じ給へかし。

(駿臺雜誌)

五 潮待つ間

幸田露伴

幸田露伴

名は成行。文學博士。文學者。東京市の人。慶應三年(一五七)生。

風に逆ひて舟を行るには「間切る」といふ工夫もあり、流に逆ひて舟を進むるには「押切る」といふ意地もあれど、ただ春の日の潮の底りて、遠淺の海の盡く干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心の焦らるゝものなり。

曾て此のことを言ひ出でて、さる折にも何とかなすべき手段はなきにや。」と、年老いて物事にいと巧者なる舟人に問ひけるに、舟人はうち笑ひ、「何時にても纜を解かんとならば、何時にても水あるところに舟を繋ぐべし。我

等は繋ぐ時には解くことを思ひて繋ぎ、解く時には繋ぐことを思ひて解く。これに反して、素人は繋ぐ時には解くことを思はず、解く時には繋ぐことを思はず。こゝを以て、歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒らに心を干潟に焦るやうのこともあるに至るなり。若し既に干潟に居坐りたる舟となりたらんには、我等なりとて、その場に臨みて何の手段かあるべき。たゞ少しは早くとも心長閑に食事などすませて、さて頓て立働かん折に足纏れのせぬやうに舟の中を取片付け、なほそれにて時餘らば、舟道具を丁寧に検め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚かしけれども、潮を待た

ぬよりは賢きわざなり。何時か一度は爲さで叶はぬことを爲しつゝ、待たば必ず來べき潮を待つに、大抵そのことは爲し果つるにも至らで、潮は早や忽ちにして來るものなり。何時か一度爲さで叶はぬことは小さき舟の中にてもいと多きものなれば、潮待つ間に爲すべきことのあるを見出して之を爲す時は、たゞ時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心の焦らるゝことなどあるべくもなし。と言ひけり。面白き言葉なりと思ひしかば、今に忘れず。

(潮待ち草)

若山牧水

名は繁。歌人。宮

崎縣の人。昭和三

年歿。年四十四。

北原白秋

名は隆吉。詩人。

歌人。福岡縣の人。

明治十八年生。

六たんぼ

若山牧水

廢れたる園に踏みいりたんぼの白きを踏めば

春たけにける

北原白秋

何といふ上品な美しい歌であらう。

つと、とある庭園に足を踏みいれると、そこら一面たん

ぼが咲き亂れてゐる。その花を踏みつゝ立つてゐる

と、嗚呼、もう春も暮れるのだといふ、暮春の感じが油然と

して胸の底から湧き上つて來るといふのである。

まことに、言葉に一分のたるみもない。「踏みいり」など

といふのも、決して不用意に使はれたものではない。單

に「入りゆき」などといふのでなく、「踏みいり」とあるので、そ

の時の作者の心が何かしら興奮して、いらくしてゐた
らしく感ぜられる。「白きを踏めば春たけにける」といふ
のでも、そのやゝ硬い古風な言ひかたの中に、言ひ知れぬ
緊張と、しんとした氣持とが含まれてゐるではないか。

いつしかに春の名残となりにけり昆布乾場のた

んぼの花

ある海邊にての作。

ぶらくと散歩の途か何かにとある荒磯の昆布乾場

に出た。ふと見ると、そこらに一つ二つたんぼの花が

咲いてゐる。「お、もういつか、これが春のなごりとなつ

たのかなあ。」といふ意味であらう。單純な歌ではあるが、これなどは最も私の愛誦する一首である。昆布の採れるところといへば、どうせ荒磯である。その乾場は砂の上か、岩の上か、いづれにせよ、とげ／＼しい荒砂か、眞黒な岩の上かと見てよからう。その時、昆布が干してあつたか如何かはとにかく、いづれ昆布の切れや、貝殻などがそこらに散亂してゐたに相違ない。渚にはかなりな浪が絶えず碎けて居り、霞みながらも、沖の方には大きなうねりが動いてゐる。其處へぼんやりと立入つて見ると、これはまた思ひがけなく、黄色い花が砂をあびて、其處此處に咲いてゐる。過ぎ去つた春を思ふ心に燃えてゐる

眼に、その二三の可憐な花が、どんなに強く映つたことであらう。

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし

畑の黄なる月の出

畑には青い幹と葉とを思ふさま生ひ伸して、蜀黍が高と茂り合つてゐる。夏の初の靜かな夕方で、その葉先にはもう露でも宿りさうだ。折しも月はこの廣漠たる平原のはての低い空に、漸く黄な色を鮮やかにして照りそめようとしてゐる。其處に一人の少年が佇んでゐる。手足の細い、色の青白い病兒である。晝間からたつた一

人で、しきりに細々とハモニカを吹き鳴らしてゐたのであつたが、もう夜にならうとするのに、一向氣もつかぬげに、猶しんみりと幼い單調な樂器を唇頭から離さうともしないといふ敍景の歌。同じことでも、たつぷりと新味を湛へて歌つてある。

石がけに子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕

やけ小やけ

「夕焼小焼」は、よく子供たちが夕焼のした時に唄ふ歌である。それをそのまま持つて來てゐるのだが、それがいかにもよく調和してゐて、わざとらしくないばかりか、そ

の匂があるために、夕焼小焼のした海邊の崖に、多くの子供が一心になつて魚を釣つてゐる景色が、はつきり水の滴るやうに歌ひ出されてゐる。

この日頃ひそかに胸にやどりたる悔いあり我を
笑はしめざり
石川 啄木

事々しく取出して言ふ程のことでもないが、此の頃、自分の心の奥には、人知れず氣にかゝつてゐて離れない一つの悔いがある。あゝせねば善かつた、あれは全く自分が悪かつたと思ふ。それが事につけ、折にふれ、絶えず氣がかりになつて、今は氣輕に笑ふことをすら許されなく

石川啄木
名は一。歌人。岩
手縣の人。明治四
十五年歿。年二十
七。

なつたといふのである。かうしたことは、誰にでもよくある事である。大概の人は、かういふ時には、自分で自分の心を瞞着して、或は無雑作に打忘れて、その悔いを悔いとせずに通してしまふ。併し、此の作者はさうではなかつた。自己に對して何處までも眞面目な作者の性格は、此處にも窺はれるであらう。

新しきからだを欲しと思ひけり手術の傷のあと
を撫でつゝ

此の歌は、啄木が晩年に腹膜炎で切開手術を受けた後の作で、意味は説明するまでもなく明らかで、眞に何氣な

い風に歌つてあるが、生まれもつかぬ傷痕をもつ人の痛ましい心がよく表れて居る。その「新しきからだを欲し」と歌ひ出して、「傷の痕を撫でつゝ」としみぐとした姿を描いてゐるのに注意しなければならぬ。又、この歌では單に肉體の傷であるが、心に傷を負うた場合にも、人はやはりこのやうな感を抱かずには居られないだらう。さういふ風にして見ると、この歌にはなかく深い味はひがある。

稀にあるこのたひらなる心には時計の鳴るもお
もしろく聴く

自分としては極めて珍しいこの平靜な心には、平生聞き馴れてゐる時計の音までが如何にも興味深く聞きなされるといふのである。この歌を味はふと、深い大洋の底に、一尾の魚が静かに尾鰭を収めてじいつとしてゐるかのやうな、静かな懐かしい印象を受ける。さうして、かうした場合にあつた作者を想像することによつて、我等はおのづと我みづからを懐かしむ心の涌いて來るのを覺える。

やゝ朝鮮服が立つて居り白くぼんやりとあさのみなとに
土岐 哀果

土岐哀果
名は善麿。歌人。
東京朝日新聞記者。東京市の人。
明治十八年生。

釜山
朝鮮全羅南道釜山府。下關との間に連絡船がある。

かうした調子の歌は珍しい。朝鮮海峽を夜の間を渡つて、ほどなく釜山に上陸しようといふので、夜の引明けの甲板に出て舳の方を眺めて立つて居ると、次第に港は近づいて來る。その港の岸に、「や、や、居たぞ、朝鮮服が。」といふのである。嚴密に言へば、三十一文字になつてゐないが、自然に出て來た聲の調子の中に却つてそれよりもよく調つた節奏がある。

(和歌講話)

七窓

土岐 善麿

東と南と北と、窓を通して三方が三方、夫々の風景と情趣の違ふことが、楽しみの一つになる。

土岐善麿
三十四頁頭註参照。

東の方が空地になつてゐる。この空地は約千坪ある。窓から傾斜の木下路を隔てて、今は青々と雑草がよくもかう延び茂つたものだと思ふ程茂つてゐる。雑草といつてもよく見ると、芒がある。そのすく／＼と卒直な、單純な青葉の靡きは快い。またよく見ると、萩も幾株かある。まる／＼と上品な嫩葉の乳色を帯びた葉裏はいかにもゆかしい。その一面の雑草を圍んで、雑木が並んでゐる。その中にも、無造作に高くなつたポプラが、枝といふ枝を舉げて、蒼空に讚美の祈をしてゐるやうな姿は何等の虚飾もなく、叫ぶならば一緒に叫びたい氣がする。この草地に注ぐ朝の雨は、わけてもすばらしい。それが

間もなく、思ひ切りよく霽れて、しつとり濡れた太陽が眞正面に、しづ／＼と昇つてくる。——もうその時は「昇つてくる」といふよりは、相應に高く昇つてゐるのだ。恰度あのポプラの枝の左肩ぐらゐのところ。——しばらく動かない、たゞくる／＼と露を振落すやうに烈しく廻る。蟬がなきはじめ。蛙の聲は耳について、つい忘れてゐるのだ。氣がつくと、随分さかんに水田の方で鳴いてゐる。

水田の方は南になつてゐる。そこは一帶が林業試験場の杜で亭々と形容すべき老松を背景に雑多な若葉青葉が重なり重なつてゐる。しかし、どれも名を知らない。

随分植物の名を知らないものだ。葱の芽の細いのに驚いたり、豆をくはへたやうな苗の並んでゐるのをみて、こやしをやる爺さんに聞いて、初めてそれがなたまめと覺えるやうな有様だから、専門的に植ゑつけられた試験場の造林が、久しい都市居住者の僕等にとつて、今はまだ懐かしいエトランゼであることを深く咎めずにくれ給へ。そのうちには植物大系とか、植物圖譜とかいふやうなものを抱へて僕もあの杜の中を散歩してみようと思つてゐるのだ。その杜と垂直に垣沿ひの檜が數十本、高々と水田のふち迄並んでゐる。

北の窓からは青麥の丘がすぐ續いて、その先の競馬場を限る檜林の、若芽の頃の乳白色のやはらかさは、これから生き延びる幾年、春を待つ心をどんなにつましく誘ふことだらうか。

その三方の窓から見透す外光の風景は、恰度額縁をはめたやうに毎日、素敵な構圖を見せてくれる。そして窓へ近寄れば近寄つたやうに、窓から離れば離れたやうに、椅子を右へ、また左へ、いざればいざつただけ、不斷に無限の變化を見せてくれる。窓は僕にとつては生きた額面なのだ。

「あたしがあすこへいよく建てる、すこしあなた額の邪魔になりますね。」

僕の庭先の南の空地へ、近く新しい住宅を建てることになつてゐる隣の人はかう言つた。

「なあに、ちつとも構ひませんよ。この大きな自然の中に、お互の小さな家なんかあまり問題になりませんものね。」

僕は笑つて窓際に立つた。

「なるべく小さく、右寄りに建てます。そしてあなたの油繪の構圖を、あまりわるくするやうな設計は出来るだけ避けますから——」。

こんな謙遜さで僕等は毎日隣同士、顔をあはせる。

(朝の散歩)

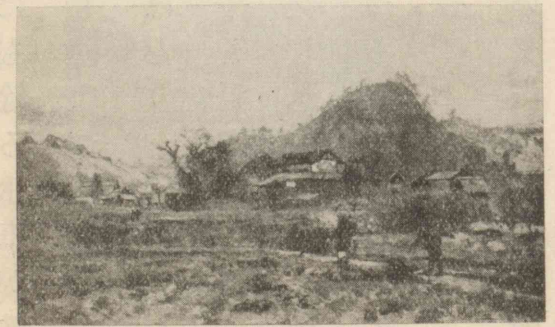
鈴木鼓村
音楽及び音楽史の
研究家。宮城縣の
人。

八 自然の音楽

一野の曲

翠濃い丘陵の際に、巨刹の屋根が見えて、揚雲雀の高く囀る日であった。川尻のせぶらぐ汀に、里の子が根芹を摘んでゐるいさゝ小川の土橋を渡つて、日の光もさゝない藪の中を出かゝると、十戸にも足らぬ草屋が立並んで、野仕事の間の午下りが朝の如く静かである。

鈴木鼓村



(筆昇井松) 春 早

梨杏などの木立を隔てて、直径丈にも餘る水車が軋つてゐる。山吹・木蓮の陰から箴せきの響も傳はつて来る。鶏が一聲長閑に鳴き渡ると、椿の花がぼとりと落ちる。桃の陰に牛が鳴く。その間、正しい拍子と長閑な旋律とを以て、ひっそりした裡に趣ある曲が繰り返される。春の香のしみ入るやうな若草の中にうづくまつて、暫しこの音に聴き入つた。

折から、雷の様な轟きが漸く近づいて、汽車は土手の上を走る。蜿蜒たる列車は長い煙を吐いて過ぎた。暫く破られた幽玄の曲がまた聞かれる。

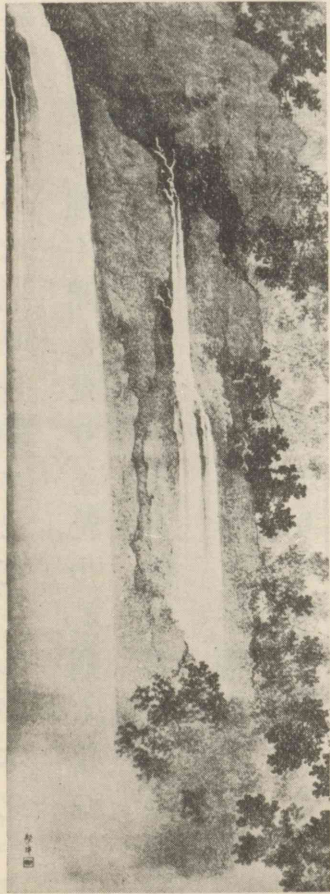
二 瀑の音

瀑の音を現した句で、自分の氣に入つてゐるのは、

あら瀑や満山の若葉皆振ふ

と云ふ漱石の句である。如何にも鞆鞆たる瀑の音を聞くやうで、一種雄大な感に打たれる。

初袷の軽い旅姿で、喘ぎ／＼細い徑でも上つて往くと、



(筆璋頼中田)圖の瀑飛

しつとりした若葉の匂が鼻に満ちて来る。汗ばんだ肌

八 汐
楓の一種。春の間
は葉甚だ紅に、夏
に入つて、綠に變
る。

も冷りとするので、「もう瀑に近づいたな。」と思ふと、どう
つと雷のやうな音を連続させて、それが木立や巖石の疎
密の加減で、強く聞えたり、また少し弱くなつたりして居
るうちに、さつと薄い霧が面を拂つて、つひ數歩前に、見上
げる白簾が現れ、巖に激して凄じい響を立てる。そのあ
たりの青葉若葉は搖ぐばかりである。崖の上には赤い
躑躅が照つてゐる。薄紅の八汐の花が翠巒の中にぼつ
りぼつりと模様のやうに咲いてゐる。
こんな光景が自ら想ひ起される。
おなじ瀑の音でも、何處か閑寂な感じのするのは、彼の
芭蕉翁の、

瓣 辯 辨

ほろ／＼と山吹散るか瀑の音
といふ句である。
春が段々開けて、山吹の花は瓣の端が白くなつて、風も
ないのにほろ／＼と散る。其處らに、餘り大きくない瀑
があつて不斷の響を傳へてゐる。その裾には水車もあ
らう、杉の林もあらう。日は麗らかに照つて、背中がぼか
ぼかするので、路傍の石に腰をかけてゐると、雉子が向ふ
の山際で一聲朗らかに鳴く。またしても山吹がほろほ
ろと散る。瀑は同じ調子で響いて居る。
翁の句はこんな境を聯想させる。

(耳の趣味)

九國歌の話

田邊 尚雄

田邊尚雄
音樂理論家。國學院大學教授。大阪市の人。明治十年生。

一國の音樂がどれ程その國の人情に左右されるかといふ事は、國歌などを見ると最もよく分る。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較する事にもなり、またその國民の氣風性質などを知る便りともなる。今試みに西洋の三大音樂國と言はれてゐるイタリー・フランス・ドイツ三國に就いて、その國歌を較べてみよう。最初先づフランスの國歌「マルセーエイズ曲」に就いて考へてみると、これには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帯びてゐる。隨つて國歌

ドイツの國歌
舊帝政時代のドイツの國歌をいふ。

の上には尊嚴といふものがない。その代り感情は實に遺憾なく表れてゐる。一體感情を極端に表すといふ事が、フランス音樂の一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌には、殊にそれが著しい。この意味でマルセーエイズ曲は、眞にフランス人民を代表する國歌としてふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍・勇猛であると同時に、また理性が明らかで、徒らに感情に走らない。隨つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心とい

崇一 出る

ラインの守 「聲は雷の如く劍の響と波の音とに交りて開ゆ、ラインよ、ラインよ、ラインよ、ドイツの防禦者よ、愛する祖國よ、ライン川の守は立てり、堅固に且忠實に。」

ふのが、また我が國や、イギリス、ロシアなどと甚だ違つてゐる。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふ事は、即ち皇室を尊重する事である。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得る事を喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。隨つて國歌には、我が國の様に皇室尊崇などといふよりは、他國に對する示威を旨としてゐる様な趣が認められる。この點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國やいづこ」を見る^カとよく分る。斯様にドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのが示威的であるのに反して、フラ

祖國やいづこ 「ドイツ人の祖國やいづこ。プロシヤか。はたスロバキヤか。ぶだうの實の^カラインの岸か。かもめの泳ぐ^カバルチックの濱か。否、否、我が國は更に大なるべし。」

ンスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を見ただけで、かの歐洲大戦争の光景が、目に見える様に感じられる。^{ヒルカ}翻つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌と言へば、「ロイヤルマーチ・オブ・イタリー」と稱せられる軍歌風の行進曲であつて、歌ではない。これはなかく面白く、愉快に出來てはゐるが、尊嚴といふ感じは少ない。餘りに巧みに作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歴史に因るものである。イタリーが現今の様に統一されて帝國となつたのは、今か

七十年程前
西紀一八六一年

ら僅か七十年程前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、随つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤルマーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養に依つて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。且またイタリーでは從來音樂が頗る發達して、作曲法の技も進んでゐたものだから、國歌が内容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲を飾り過ぎてしまつたのである。

さて日本の國歌はどうであらうか。「君が代」は宮内省

林廣守
元宮内省雅樂部副
長。明治二十九年
歿。年六十六。

雅樂部の林廣守の作曲で、割合に新しいものであるに拘らず、イタリーのとは大いにその性質を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗なる旭日の



林廣守

意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の威嚴を示す表徴となつてゐると言つてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を着けたけれども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則つて作られたのが現今の「君が代」である。我が國

の國歌が、かゝる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手に成

つたといふのは、ちよつと異様

であるが、實はそれが我が國の

大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞

に大和民族の眞情を流露した

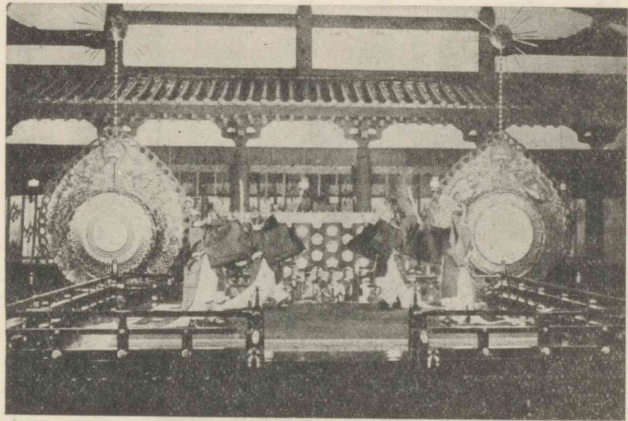
音樂である。かの神武天皇御

作の久米歌に依つて作られた

久米舞などは、いかにも雄大且

莊嚴なもので、これを宮中の饗

宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉いのに驚



久米舞

歎するといふ事である。斯様に大和民族本來の特性を

失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音樂が、い

はゆる雅樂である。さうしてこれを大體保留して傳へ

てゐた宮中の雅樂師が、「君が代」を作曲したのであるから、

それが大和民族本來の性情を具へてゐて、しかも、形式に

於て可なり立派なものであるといふのは、當然な事であ

る。

徳富蘆花

名は健次郎。小説家。熊本縣の人。昭和二年歿。年六十。

富士一つ云々
蕪村の句。

一〇 麥秋の頃

徳富蘆花

六月になつた。麥秋である。「富士一つ埋み残して若葉かな。」その若葉の青暗い間々を、熟れた麥が一面、日の出のやうに明るくする。陽曆六月は「農功五月弦」よりも急なり。」といふ農家の五月だ。農家の戦争で最激戦は六月である。六月初旬は、小學校も臨時農繁休をする。猫の手でも使ひたい時だ。子供一人、どうしてなか／＼ばかにはならぬ。初旬にはもはや蠶があがるのだ。中旬には大麥、下旬には小麥を刈るのだ。もう梅雨に入つて、じめ／＼した日が續く。蓑笠で田

も植ゑねばならぬ。畑がちの村では、田植は一仕事、田植をしまふと、さぼ／＼するね。」と皆がいふ。雨間を見て



植田

は、刈り残りの麥も刈らねばならぬ。刈りおくれると、畑の麥が立つたまゝに粒から芽をふく。油斷を見すまして作物そつちのけに増長して

來た草も取らねばならぬ。甘藷の蔓もかへさねばならぬ。陸稻や黍、稗、大豆の中耕もしなければならぬ。二番茶も摘まねばならぬ。お屋敷に叱られるので、東京の下

四圓十五錢
一貫目につき。

肥^{こえ}ひきにも行かねばならぬ。時も時とて飯料の麥をき
らしたので、水車に持つて行つて、一晚寝ずの番をして春^ツ
いて來ねばならぬ。もう甲州の繭^ミ買が甲州街道に入り
こんだ。今年は値がよくて、川端の岩さんの家では、四圓
十五錢に賣つたといふ噂^{ウザ}が立つ。隣村の濱田さんも繭
買を始めた。工女の四五人入れて、足踏^{アジ}機械で製絲をや
る仙^セちやん、長さんも、即座師^{ソウ}の鑑札^{カン}を受けて繭買を始め
た。自家のお春^{ウチ}つ子、お兼^{カネ}つ子に一貫目何錢の搔^カ賃^セをく
れて、大急ぎで搔いた繭を車に積んで、重い車を引張つて、
こゝそこ相場を聞きあはせ、一錢でも高い買手をやつと
見つけて、一切^{イチ}合切^カ屑^ケ繭^ミまで賣つてのけて、手取が四十九

葦切



圓と二十五錢。夜の目も寝ずに五十兩足らずかと思
うても、やはりまとまつた金だ。持つて歸つて、古^{ふる}箆^{せん}筒^すの奥
にしまつて、茶一杯飲むと、すぐ畑に出なければならぬ。
空ではまだ雲雀が根氣よく鳴いてゐる。村の木立の
中では、いつの間にか栗の花が咲いてゐる。田圃^{タノ}の小川
では、葦^{あし}切^{きり}が口やかましく終日^{シュウジツ}騒^{さわ}いでゐる。ほとゝぎす
が啼いて行く夜もある。梟^{ふくろう}が鳴く日もある。水^く鷄^{ひな}がこ
とことたゞく宵^よもある。螢^{へび}が出る。蟬^{せみ}が鳴く。蛙^かが鳴
く。蚊^かが出る。ぶよが出る。蠅^はが眞黒にたかる。蚤^かが
跋^ハ扞^ツする。かなぶん^カ瓜^ウ蠅^ハてんたう^ウ蟲^{ムシ}、野菜につく蟲は限
りもない。皆^い生^の命^ちだ。皆^い生^のき^のね^のば^のら^ぬのだ。どうせ

とりきれることではないが、うつちやつておけば、野菜が全滅になる。とれるだけはとらねばならぬ、こつちも生きねばならぬ人間である。手が足りぬ。手が足りぬ。自家の人数ではやりきれぬ。はては甲州街道から地所にはなれた百姓を雇うて、一反いくらの請負で、田も植ゑさす、麥も刈らす。それでもまだやりきれぬ。墓地の骸骨でも引張り出して来て使ひたいこの頃には、死人が大病人の外は手をあけてゐる者はない。盲目の婆さんでも、手さぐりで茶ぐらゐは沸かす。豌豆や隠元は畑に珠數なりでも、もいで煮て食ふ暇はない。如才ない東京場末の煮豆屋が鈴を鳴らして来る。飯の代りに黍の餅で

ニとほり
薬罐(罐)

濟ます日もある。近い所は、起きぬけに朝飯前の朝作り、遠い畑へはお春つ子が片手に大きな薬罐、片手に茶請の里芋か餅かを入れた風呂敷包を重さうにさげ、小さな體をゆがめて、お八つを持つて行く。この季節に農家を訪へば、大抵は門をしめてある。猫一匹ゐぬ家もある。何を問うても、くるくとした眼を見張つて、「知んねえや。」と答へる五つ六つの女の子が、赤ん坊とたゞ二人留守してゐる家もある。こんな時によく子供の大怪我がある。家の内は麥の芒だらけ、墓地は草だらけで、お寺や教會では、坊さん・教師が大あくびしてゐる。後生なんか願うてゐる暇がないのだ。

(みづのたはこと)

尾崎喜八
詩人。東京市の人。
明治二十五年生。

二私の村

尾崎喜八

停車場を出て

土産の買物の包を小脇に

無味殺風景な白茶けた道を

足ばやに汗になつて

たうとうこの丘の上に立つ

ああ緩やかにうねる並木路のはづれ

高く青青と

海角に寄せて碎ける大波のやうな

一塊の森の頭

あれこそ私の住む村だ

何といふ美しい村だらう

何といふ木立に恵まれた村だらう

七月の夕暮の空は

薄紫の晶玉の清らかさで

朱鷺^{とぎ}の脱毛^{はげ}のやうな細い雲が

すらすらと

軽い模様を描いてゐる

私が其處の家に着く頃には
 水の垂れさうなあの空へ
 宵の明星がたつた一つ
 びかりと
 金の印璽を捺すのだ

さうすると

村中が柔らかい深深とした蔭に満たされ
 月見草と小川とだけが闇に浮き
 家や庭などは
 咲き亂れた星の花の下で

ただ地上の小さな燈火の
 光ばかりになつて了ふだらう

其處へ歸つて

井戸から冷たい水を汲みあげ
 汗をさつぱりと流し去つて
 さてこの包を解くのだ

ああ、そのわが村わが家が
 向ふに見える

下田次郎
文學博士。東京女子高等師範學校教授。東京市の人。

一二 味はひある生活

下田次郎

物には味といふものがある。砂糖は始から甘いし、錫は噛んで居るうちに味が出て来る。どちらもその物をもつた味であるが、その外附味といふのもある。きなこ餅や田樂豆腐などはそれである。本人に取りえのある人は、砂糖や錫の如く、着物や紅白粉で外から味をつけた人は、きなこ餅や田樂豆腐の類であらう。生活でもやはりそのやうなもので、本當に味はひのある生活と、一向見かけ倒しの、實質的には何等の味はひもない生活とがある。或高原に避暑に行つて居る婦人が、

夫の車の後押しをして行く農夫の妻を見て、羨んだといふ事を聞いたが、年中することもなく、美服を着て人形のやうにして居たのでは、さぞつまらない事であらう。する事のない人間ほど氣の毒なものはない。世には交際が生活だと思つて、頻りに交際に勉めて居る人がある。かゝる人は、結婚の披露に呼ばれることと、葬式に行くことと、出産の喜びに行くこととが、生活の重大事件だと思つて居る。これは、多くは形式的表面の生活で、自分の生活の實質に關係のあるものではない。かかる人達の生活から儀式を除いたらば、何が残るか。繪の貴ばれるのは、その繪が傑作であるからであつて、額縁

が立派だからではない。世間には中味の繪を忘れて、額縁が立派だと思つて居る人もある。富み足る生活は貧苦と缺乏との生活よりは好ましいものであらう。しかし、それも人に由るので、何をするといふ目的もなく、學問・能力もなく、徒らに富み足りた生活は退屈である。停車場で一時間汽車を待つ退屈さから推して、一生汽車を待つ退屈さが續いたらば、どんなに苦しいことであらう。ショーペンハウエルは「退屈ほど堪へられないものはない。そしてその眞の源は、心の空虚にある。」といつた。かゝる退屈の生涯こそは、眞に悲惨なものである。

ショーペンハウエル
獨逸の哲學者。西
紀一八六〇年歿、
年七十三。

小人間居
カス
カス
カス

かゝる生活は欠伸の連發か、儀式・社交の出入かの外に取るべき途はなく、その結果は顎骨の發達か、世辭の巧妙となつて、眞の生活と何等の交渉もないものである。

若き時學ばぬ悔いをかみしむる

奥齒なきまで身は老いにけり

はまだいゝが、若い時分からこれでは、何のための人か分らない。内容の空虚な人の交際ほど慇懃を極めたものはない。それより外に何物もないからである。「つれづれといとまあるまゝに、訪ひ來りて長居するはわびし。」と貝原益軒は困り、世俗無用の長談御用捨下さるべく候。と平田篤胤は斷つた。しかし、それより外に、暮し方のつ

貝原益軒
別號損軒。名は篤
信。儒者。博物學
者。筑前國（福岡
縣）の人。正徳四
年（三三）歿、年八
十五。
平田篤胤
通稱大鯨。國學者。
羽後國（秋田縣）の
人。天保十三年（三
三）歿、年六十八。

かぬ人があるのは氣の毒である。その反對に、いくら聽いて居ても飽きない、切上げられるのが惜しいやうな話をする人もある。それは學殖や趣味のある人の話である。そんな人になりたいものである。

生きるといふことは、世界に於ける最も稀有なことである。古人は「汝自らを知れ。」といつたが、それより大切なのは、「汝自らであれ。」といふことである。多くの人間はたゞそこに居るといふだけである。人が物質的に何をもつて居るかは大した問題ではない。大切なのは、その人が何であるかである。人は自己の有する特長を發揮し、自己として最も價値ある生活を營

汝自らを知れ
ギリシヤのアポ
ロンの神殿に掲げ
られた語で、ソク
ラテスがその活動
の標語としたも
の。

むべきである。

とのオスカーク・ワイルドの意見には、少しく生活といふ事について考へる者は、共鳴せざるを得ないであらう。外から附けた物で生きて居る人は、それが何であらうとも、大した人間ではない。又婦人はダンスと筆箆が好きだといふが、着物と踊とが生活の内容なら、美装した猿だつて、そのくらの生活はする。貧乏で苦しい生活にも生活の味はひがある。否、人間の靈性が光を放ち、その最善が發揮されるのは、富裕と安逸との生活よりも、寧ろ貧乏と苦痛との生活に於てである。眞の喜びは、安樂の生活に於てよりも、却つて困苦の生活に於て味ははれる。

ワイルド
英國の文學者。西
紀一九〇〇年歿。
年四十五。

畫家ミレーは、如何に貧乏を材料として、その生活と繪畫とを作り上げたか。傑作は必ずしも作物にのみあるのではない。生活そのものにも傑作はあるのである。ミレーに繪畫がなくとも、その作品以上に、その生活が傑作であつたのである。凡人として生活の傑作は望めないとしても、生きがひのある、味はひのある生活はしたいものである。それは唯交際や、儀式や、買物や、ダンスや、着物の見せ合ひの生活ではなくて、奮闘の生活であり、努力の生活であり、汗の生活であり、血のにじむ生活でなくてはならぬ。緊張もなく、感激もない生活、水にふやけたパンのやうな生活に、何の味はひがあらうぞ。

立てる農夫云々
西 諺。

「立てる農夫は坐せる紳士に優る。」といふ語があるが、同じことが婦人についてもいへるであらう。遊んで暮して居るのが見えの時代は過ぎ去つた。何か意義のある事をして、生活の内容を充實しなくてはならぬ。節窓の人形のやうな生活は、如何に美しくても駄目である。あらゆる附加物を取去つて、正味の自分が何であるかを考へて見よう。豊富な學問、優秀な技能、貴重な經驗、洗煉された趣味、微妙な感情、暖かい同情、燃ゆる意氣、不撓の努力、それらが縦絲横絲となつて織りなされた生活こそは、眞に錦繡の生活であつて、最も生きがひのあるものに違ひない。

(婦人と希望)

鶴見祐輔
政治家。群馬縣の
人。明治十八年生。

一三 世界三都の印象

鶴見祐輔
ツルミ ヨウスケ

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。併し、其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本質的の差がある譯はないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形的形式的相違だけには止まらぬやうである。それは兩國國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば、其の國民性は如何に相違して居るだらう。こんなことを考へながら、私は一人で能くパリの公園を歩いてゐた。さうして、これにアメリカを今一つ加へて、能く三國の國民性を

比較して見た。

三國の特色は其の大都會に於て著しく眼に着く。それは都會は其の國の國民性を最も鮮やかに映し出して居るからである。多くの人はニューヨークはあまり歐洲化して居ると言ふが、併し、ニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずには居られない。ニューヨークはやはり米國である。さうして、ロンドンに於ては英國であり、パリは佛國である。——恰も東京が日本であるやうに。

話はまた英佛人の勤勉性に還る。朝早くパリの街を歩くと、石の鋪道の上にはもう綺麗に打水がしてある。

凱旋門ガイセンモンのあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舎とともに、心地よい朝の活動を象徴シヨウワして居る。黒い質素な着物を着た女たちが、耳に快いフランス語で笑ひ興キョウワじながら、忙しげに花に水を灑そそいだりして居る。

ロンドンの下町シタマチに晝頃行くと、狭い側道ソバミチの上に、商館や銀行などの事務員かと思える若者が、帽子も冠かんむりらずに、何百人となく忙しげに往來して居る。私は此の群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつて居る此の人々の日常生活を考へた。さうして、フランス人とは種類の違ふ此の人々の勤勉さ

クルヴァン
フランスの女流小
説家(一九一〇)

をも考へた。こんな時には、何時もフランスの小説家クルヴァンの言葉が脳裡ノウレイに閃ひらいた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵セイレイである。」と。パリとロンドンとの生活を見て居る内に、此の言葉の深い意味が、日一日と自分の頭腦ザウノウに深く沁しみみて行つた。晴れ渡つた初夏の日盛りに、寸刻スンコクの隙すきもなく、花から花へ蜜を求めて翔かつて行く可憐カレンな蜜蜂の勤勉が、如何にも能く佛國人の朝起の心持を現して居るやうに思はれた。さうして、來るべき冬の支度のため、營々エイエイとして重い餌エを引摺ヒキズつて行く健氣ケンキな蟻の精根セイコンが、如何にも能く英國人の勤勉を現して居るやうに思はれた。

観音堂
東京市浅草公園に
ある金龍山浅草
寺。

それならば、米國人のあのいらくした忙しさは何に
喩へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと浅草
の観音堂の鳩が浮かんで来た。いつ行つて見ても、大勢
の人込の中で、幾十百羽の鳩が、我劣らじと押しあひへし
あひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅かされて飛び立
たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は
一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも
餌を拾つて居る。米國人の勤勉は正に此の鳩のやうに
餘裕がないと、私には考へられた。

朝の出勤時間頃に、ニューヨークの地下鐵道に乗る人々
は、これが此の世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれ

阿鼻叫喚
地獄の苦しみ。

沓一沓

るやうな雑沓を目撃する。或日、私は汽車の切符を買ひ
に市内營業所まで行つた。大勢の客が群集してゐた。
係の若い米國人が、私の行先と列車とを聞き取り、頓て右
手の袖を一寸捲り上げて、鉛筆持つ其の手を切符の紙の
上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣
に取られて見て居ると、忽ちかつと手を紙の上に落して、
するくくと切符の文字を眼の廻るやうな早さで書き終
へた。只今手を振つたのは、結局手に運轉を附ける爲だ
つた。私は噴き出すやうな可笑しさを感じた。何もさ
う手に運轉を附けないでも、大して時間に相違もなく字
が書けようし、また運轉を附ける時間だけ無益のやうな

氣がした。

其の翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金引上の一覽表を貰ひに行つた。すると係の若い英國紳士が、「たしか此の机の中に一枚だけ統計表を入れて置いたはずだ。」と言つて、自分の机の抽出を開けた。私は見るともなく其の抽出の中を覗き込んで見て驚いた。まあ、何といふ多數の書類だらう、累々と種々な紙片が堆積されて居る。それを件の若い紳士は手をつ突つ込んでがさ／＼と掻き廻して、「此處にはない。」と言つて、次の抽出、また其の次の抽出を開け、さうして、最後の抽出の底から、やつと賃金表を見附け出した。「これは差上げるわけに行かないから、

此處で見て下さい。」と言ふから、一度見ただけでは逆も覺えられませんね。」と答へると、ちよつと當惑して、「それでは私が寫してあげませう。」と言つて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍に居る若い女のタイピストに命じて、一分間に寫させるところであるが、件の若い紳士は、先づ自分の机の上の大きな吸取紙の上、に原本の統計表を置いて、其の上に白紙を當てて書き出した。私はちよつと面喰らつた形で、此の異様な淨寫法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。さうして、今度は其の白紙を左手で持上げて、下の原本を覗いて次の行の數字を諳記して、また白紙を其の上

にべたりと置いて、諳記しただけを書いて、また前のやうに紙を持上げて原本を覗き、また其の上に重ねて書いた。不思議な遣り方だと見て居ると、やがて書き終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度は其の紙と原本と二枚持上げて、下敷になつて居る吸取紙の上に裏向きに置いて、丁寧^{ライネス}にインキを拭ひ取つて、さて私に其の淨書をくられた。ニューヨークから到着したばかりの私は、全く呆氣に取られて此處を出て行つた。さうして、幾回となく鉛筆を持つ手を振つて運轉を附けて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

其の春、パリの郵便局に書留小包^{カキトメフズツミ}を出しに行つた。慣^ナ

れない私は誤つて受取人の欄へ自分の住所姓名、差出人の欄^{ラン}へ先方の住所姓名を書いてゐた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣附いて「おや。」と言ふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消^{マツシヨウ}して差出人と書き差出人といふ字を抹消^{マツシヨウ}して受取人と書いた。なるほど、これで送票^{ソウビョウ}は完成した譯である。然もそれがほんの一瞬間だつた。私は全く感服して了^{シマ}つた。さうして、ニューヨークの切符賣と、ロンドンの役人と、パリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。——鳩と蟻と蜜蜂と。

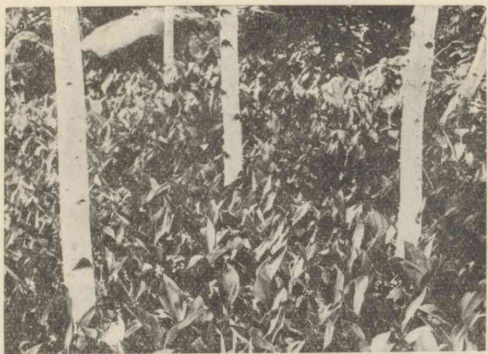
黒田初子
登山家。

一四 山の感觸

黒田初子

「未だ山に登つたことが無い。」といふ人でも、所謂日本アルプスや、秩父に入つたことが無いといふだけで、誰でも家の裏山や、ちよつとした丘陵などには登つたことがあるでせう。さうすると、平地にゐる時とは全く異なつた、清々とした氣持になり、今迄見えなかつた遠くの山々が、美しい線をひいてゐるのに驚くでせう。それから、同じ大空の下にゐるとは思へない程に、雲の色や形の美しさに驚嘆の目を見はるでせう。そして、登る時には少し足がだるくても、「あゝ登つてよかつた。」と勇んで駈け下りることだと思ひます。

まして、海拔五千尺から一萬尺の山に登つてみれば、それは裏山などの比では無い。千古不伐の晝なほ暗い大



白樺と鈴蘭

森林の中を歩む時、その静寂は全く都會の騒音を忘れさせ、頭のしんから休まる思ひがする。さういふ林の中の小徑は軟らかで、ふかふかと草鞋の足に何とも言へない優しい感觸を樂しましてくれる。若し又雨が降つてゐたらば、身體の濡れるのを嫌ふより先に、美しく清められた樹々の翠に新たな美を見出すでせう。黒木の森を過ぎ、

白樺の生えた山路にさしかゝれば、低い所では見られな
いこの木の幹の色は白く、感傷的な若い人達に、数々の優
しい詩を與へる事とせう。

もつと高い所になれば、偃松ヤイソウが出て來ます。その下か

らよちく／＼出て來る雷鳥の

可愛らしき。あれに石をぶ

花つつけて殺した人があつた

畑といふ昔の話を聞いて、どん

なに驚いたこととせう。何

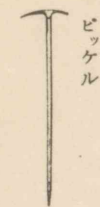


も悪戯わるさをしないで、親子睦いっぴじく岩陰を散歩してゐる姿は
どんなにか山行く人の心を和らげてくれるものでせう。

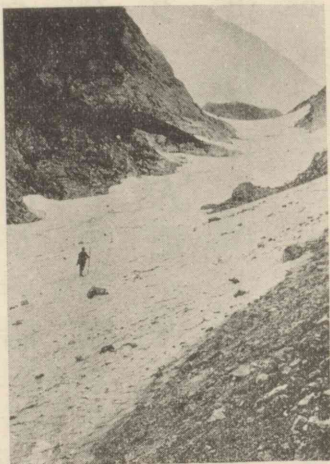
その他、私共を喜ばせるお花畑がある。私などは花が好
きなので、お花畑と聞いただけでも、もう嬉しくなつて了ふ
がつしりした岩から、目も覺めるばかりに派手な花が生
えて、風にゆれてゐるのも美しく、五色ヶ原の様に、一面に
足の踏み場もない程に、無數に花が咲いてゐるなどは、こ
の世の樂園としか思はれない。高原に寝ころんで、何だ
か佳い香りがすると思つて氣をつけてみると、耳のまは
りに一ぱいに鈴蘭が立つてゐるなどは、何といふ嬉しい
こととせう。

このやうな女性的な美しさもさることながら、天をつ
く巨大な岩峯イソトウや、風雪にさらされた岩肌イソトウや、魔物のやうな

口をあいた雪溪の龜裂などは、又一種特別な魅力を持つてゐる。どこから登るのか殆ど手のつけやうのない岩壁が、私共の行手にあつたとしたらどうだらう。山人の胸は、その岩峯が峻險なら峻險な程、高鳴るのである。ロープを肩からおろす手には眞劍な力がみなぎり、登路を探さうとする目は、隼の様に鋭く光るでせう。そして一度その岩壁に攀ぢ上るや、一舉一動は總て尊い生命を的にしての動作である。ぐいぐいと手懸りを得て登るのは、實に愉快の限りである。そして自分が足場のよい所へ落着いて、親しい友の登攀を確保し、お互に一條の繩で生命を共にするものである。山で結ばれた友情は、どれ



ピッケル



白馬の雪溪

だけ強いものか判らないと言はれるが、殊に繩で結び合つた仲間、同行者の中でも一層親しみを感じるものである。下から見上げて武者ぶるひさせられた岩峯の頂に立つた時の氣持は、他のどんな遊びでも味はふことのない喜悅を與へるものであらう。

岩もこの様な緊張を私共に與へてくれるが、氷も亦同様である。滑り易い氷や雪の急坂を登るのは、手懸りが無いだけに一層不安である。秘藏のピッケルで足場を切り、下も覗けない様な急坂を横

切るのは全く眞劍そのものである。又、雪溪の龜裂に出
 合つた時も、どんなに心を用ひることでせう。飛び越す
 ことの出来ない様な魔の口がてらくと蒼く透きとほ
 つて、底知れない溝をつくつてゐる。數貫の荷を負つて、
 ひたすらこの雪溪を登りきらうと、早朝から一步々登
 つて來た人達が、どうしてこの魔の口に追ひ返へされて
 退く氣になれようか。どうかして渡り度いと願ひ、長い
 クレパスの内の一番狭さうな所を探すもどかしさ。さ
 うしてゐる内にも焼けつく様な太陽の熱は氷を溶かし
 て、一層口を大きくさせるかときへ感じられる。
 山の豪雨や落雷の凄さも、到底下界では想像も及ばな

クレパス
 氷河の運動又は溶
 解によつてできる
 雪の隙間。

い。その他、冬の登山で經驗する極寒に對する忍耐や、雪
 崩に遭ふまいとする心遣ひなどを思へば、山登りは唯樂
 しいからするとか、美しい景色だから行くとか言ふには、
 餘りに大きな苦痛を伴なふ。二百米もある斷崖から落
 ちて全身に數十箇所の傷をした人が、二箇月と經たない
 内に、同じ岩壁に攀ぢようとした話を聞いたことがある。
 山に數十回登つた人で、よくあの時無事だつたとか、もう
 一足で滑りが止まらなかつたら生命は無かつたとか、さ
 ういふ經驗を一つも持つてゐない人は無いやうだ。そ
 れでも決して懲りないで、精出して行くのだから、山の好
 もしき感觸は、説明以上のものなのであらう。
 (婦人の山とスキ)

北尾録之助
新聞記者。寫眞家。
愛知縣の人。明治
十七年生。

一五 お花畑

北尾録之助

お花畑の美は、到底地上のものではありません。私
ちは、僅か二三間を取圍んだ庭の花壇に咲く草花の群生
にも、その美に恍惚とすることがあります。高い山のお



白馬のお花畑
(高橋秋華筆)

花畑はこの群落が方幾町時として里餘にも續きます。

私たちは、いま迄「なぎ」をへつつたり、「おしだし」を横に絡

んだり、「瘠せ尾根」を這つ

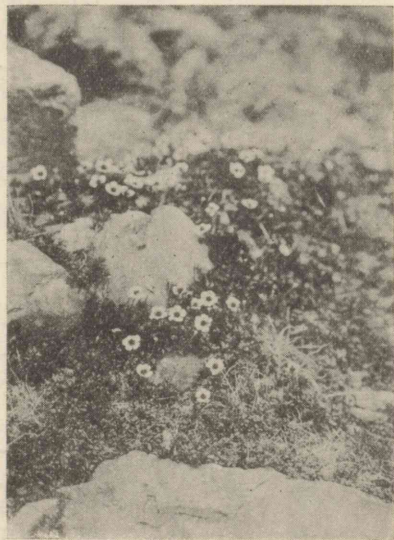
たりして、その磊々たる

尖銳に勞れ、全身の神經

を一本の「アイスアックス」

に、集めて、漸くここまで、

辿つたのです。雪溪、千



高山植物

アイスアックス
登山者が氷面に足
がかりを穿つに用
ひる斧。

古消えざる雪の閃き！そして道は、漸くなだらかな、草

地に出たかと思ふと、どうでせう、見渡す限り、百花爛漫た

るお花畑！

蒼空(アヲソウ)を仰ぎます(イミカヒマシム)。
傍(ワタリ)の小さい白い可憐(カレン)な花をとつて、そ
つと唇(クサビ)につけました。
「一萬尺のこの天壇(テンダン)お前はこんな
所に咲いて、よく私等を待つてゐて呉れたね、やさしい花
よ、勇ましい花よ、淨い、汚れない高嶺(タカネ)の花よ。お前の名は
？」
「ミヤマウスユキサウ！」

私たちはいきなり、その花の床にどしんとひつくり返
つて、蒼空(アヲソウ)を仰ぎます。何ともいへない感情が頭から全
身を捉へました。傍(ワタリ)の小さい白い可憐(カレン)な花をとつて、そ
つと唇(クサビ)につけました。「一萬尺のこの天壇(テンダン)お前はこんな
所に咲いて、よく私等を待つてゐて呉れたね、やさしい花
よ、勇ましい花よ、淨い、汚れない高嶺(タカネ)の花よ。お前の名は
？」
「ミヤマウスユキサウ！」
イハギキヤウ・ウルツプサウは紫に、キバナコマノツメ
ウサギギク・ハクサンオミナヘシは黄に、ミヤマハ・コグ
サ・バイケイサウ・ギンバイサウなどは白に、あらん限りの
美を競(キヨ)うて、私たちの身體を埋めて咲き亂れてゐます。

雲と雪とに培(リキカ)はれて、未だ全く下界の風に觸れない、ほん
たうの清淨(セイジョウ)さ、それにまたこの廣さ、神様は全く贅澤(ゼイタク)だと
思ひます。

これ等の高山植物で有名なのは、矢張り信州では雪の
多い白馬岳でせう。雪の多いといふことが濕地(シツチ)を好む
植物の群落を助けるのです。
彼等は荒い風に當らないやうに、なるべく背を低く、莖
を短く太く、根を長くして、山の肌にしつかりと食ひ込
ねばなりません。その葉も、肉を厚くし、高い處では稀薄(キハク)
な空氣の中から餘計に酸素を吸入する必要上、下界のも
のよりは、葉の氣孔(キコウ)を澤山つけねばなりません。さうす

ればまた蒸發作用で死ななければならぬのを、神様は山といふ山に、絶えず雲の濕氣や、雪の恵みを與へました。そしてわざ／＼可愛い身體に似合はぬ、あんなに立派な大きな、色彩の鮮やかな、美しい花をつけました。誰も來ないこの高山では大切な花粉の仲介者ケユウカイである蟲が來ないため、出来る丈け、大きく、美しく、一杯に美を競つて、雲間を飛ぶ高山蝶などの心を惹きつけねばならないからです。しかし、その美は、ほんたうに瞬間的のものであります。姿一杯に咲き満ちさへすれば、惜し氣もなく嵐の手に委ねて散つて行きます。ほんたうに、優しい、勇ましい、高山植物の心！

彼等は、また、思ひ／＼にその好きな處に育つて、少しも好まぬ處に、その美しい花をつけません。

シコタンサウは好んで岩角の上に、ハクサンコザクラは傾斜が緩くて濕氣の多いところに、ウシノケグサやアキカラマツは石灰質セツカイシツの地を好みます。イブキジャコウサウやオノヘリンダウ・テガタチドリなども、石灰質のところを選びます。コメス、キ・タテヤマキンバイガンコウランなどは、白い美しい輝きを有する、石英質セキエイシツの岩山に好んで咲き亂れます。

かういふ、彼等の生育分布。それは一寸でも違つたところへ移し植ゑれば、すぐに枯れ萎んで終ひます。地質

の適不適ばかりでなく、高嶺から下界に移し變へられても、忽ち枯死するか、でなくとも、あの天壇に咲き誇つてゐた時のやうな、美しい、氣高い姿は、もう再び見ることが出来なくなります。

葉が薄く、大きく、軟らかくなります。莖がどんく長く伸びます。そして、雪に反映した、その時の立派な花は、いつか色が褪せて、小さくいぢけた様になつて終ひます。或學者は、嘗て二百二種の平地の植物を、高さ三千米の處へ連れて行つて、植ゑてみたところ、その中八十種は死んだけれど、残つたものは、みな、いつとなく、背を縮め、葉を小さくし、根を長くして、「これではいけない、用心しろ」と、み

な強烈な風雨に堪へるやう、その姿を變へたと云ひます。

高山では、雪のあるところ、風の吹くところ、日の當るところ、それが地形に依つて、二間、三間と、違ふところがあります。同種の草も、こちらでは蕾、それにあちらでは花盛り、向ふでは實を結んでゐる、といふやうなことをよく見受けます。一本の山櫻が最上部にさくらんぼうをつけてゐるにかゝらず、下の枝は、蕾だといふやうなものをよく見受けるのです。

多くの登山者の中には、たゞ、平地には多く見ないといふ簡単な理由の下に、無暗に採取して、漸くその影を失はうとしてゐるのがあります。淡紅色の美しい花を開く

コマクサは薬になるといふので、木曾御岳邊りでは、一束二十七本位宛を束にして、「お駒草」など云つて、かなりの高價に買手があるため、だんくくと駒草採りが、附近の高山を荒し、乗鞍・八ヶ岳・白馬などを、すつかり荒し盡くしたと云ひます。高山植物の保護方法として、各登山口に其の筋から建札して、學術研究上の外、採集は一切禁ずる旨を掲げ、採取しようとするものは、營林署に願ひ出でて許可を得ることとし、山に依つては、一人幾株等といふ制限を加へたところもあります。要するに、天外無邊のところこの取締は殆どつかないやうであります。いまは各自公德に待たねばならぬと思ひます。

植物でも、動物でも、みな生きてゐて感情をもち、各自の好きなどところに、飛んだり、咲いたりしてゐます。それ等はその飛ばしたり、咲かしたりして、そのまゝ眺めてこそ美しさも、面白さもあるのであります。

私はよく山に行きます。しかし、まだ一株の草を、私の狭い前庭に下さうとは思ひません。假令、採集者の手にかゝつても、今日ではどうしても、下界で生育せぬものが十數種あります。これ等はどうしても高嶺の雲と、雪とに返さねば、忽ちに自滅するといふのであります。節操セツソウを死守する氣高い婦人の倂オモケケがあるではありませんか。

(山岳巡禮)

海上龍子
歌人。海上胤平の
養女。福島縣の人。
明治十三年生。

茶白山
大阪四天王寺の西
南にある。

夏の陣
元和元年(三七七)。

去年
慶長十九年(三七
四)。

一六一樹の陰

海上龍子

影にそふ形のごとく亡き靈も

君を守りて離れざりけん

茶白山の和議争でか長へに平和を保たんや。これ固より一時の権謀に過ぎず。軍馬を休めしも束の間にて、再び夏の陣とはなりぬ。關東の寄手大舉して大阪城を圍む。故太閤の餘徳を偲びて參集せしもの數萬騎に及べども、譜代の士少くして、多くはたゞこれ烏合の勇士のみ。

去年の十二月二十二日、和議の御誓文御取交の使とし

木村重成
豊臣秀頼の臣。

今福
今大阪市鯉江町。

て、主命を辱かしめず、然も其の威風關東武士の膽を寒からしめ、なほ老將家康をして感涙の袖を絞らしめたる木



木村重成(種百畫史)

村長門守重成の妻は、眞野豊後守頼包の女なり。容姿の美にも彌増し、心は優にして操いと高し。

昨日今日夫の氣色常に變りて、食事さへ斥け、深き思案に打沈めるを見て、訝しさに堪へず、夫に向ひて、「去年今福の合戦に、君の功名の大なりしには、關東五

十萬の大軍も驚きたりと傳へ聞き侍り。今豊臣氏の武
 運は朝暮に迫れり。日頃の御高恩に報い奉るは今日な
 り。然るに、何とて、物思はしげにして、食事をさへ斥け給
 ふぞや。」と問ふ。重成莞爾として打笑み、「御身の訝しむ
 も理なり。こは餘の儀にあらず。五穀胃に入りて、二十
 四時を経ざれば消えずといへり。今はいつ討死するか
 測り難し。されば、穢き物を斥けて、潔き心を出さんのみ。」
 と。夫人これを聞きて欣然として退く。

翌朝起き出づれば、こは如何に夜半の嵐も吹かなくに、
 難波の春に先立ちて、散り行く梅の花一輪、我と我が喉搔
 切り、見事に自害して夫を勵ましたり。重成且驚き且悲

明暗
 暗
 明

一樹の陰云々
 「一樹の下に宿り、
 一河の流を汲み、
 一夜同宿、一日夫
 妻、皆是れ先世の
 結縁。」
 (説法明眼論)

項羽
 名は籍。楚の人(西
 紀前三三二一〇〇)。
 虞氏
 項羽の妾。
 木曾義仲
 源為義の孫。義賢
 の子。壽永三年(一
 一八四)歿、年三十一。
 松殿の局
 關白藤原基房の
 女。基房は松殿と
 稱した。このこと
 は源平盛衰記卷三
 十五にある。

しみつゝ、妻の遺書を見れば、水莖の跡鮮やかに、

一樹の陰、一河の流、これ他生の縁と承り居り候が、さ
 てもをとゞせの頃ほひ、偕老の契をなしてより、たゞ影
 の形に添ふが如く思ひ參らせ候に、此の頃承り候へば、
 此の世かぎりの御催の由、陰ながら嬉しく思ひ參らせ
 候。唐の項羽とやらんは世に猛き武士なれど、虞氏の
 爲に名残を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別れを惜し
 みきとかや。されば、世に望窮りし妾が身にては、せめ
 て御身の御在世の中に最期を致し、死出の道とやらん
 にて待上げ奉り候。必ず秀頼公多年海山の鴻恩を御
 忘却なきやう頼み上げ參らせ候。あら〜かしこ。

長門守重成様

妻より

さても健氣なる覺悟やと、疾くに死を決したる重成の心は、妻の自殺によりて益、固く愈奮ひぬ。今福の合戦に一騎當千と聞えし剛の者木村重成も、元和元年五月六日、遂に其の首を安藤某の手に渡しぬ。

若木の櫻は散りても、髻の中の蘭麝の薫は長へに世に匂ひて、今に滅びざる天晴ゆかしき重成の最期と共に並び稱へらるゝは、其の妻の最期なり。時に重成は二十一歳、妻は十八歳なりき。

(たのもしき婦人)

橘南谿

本姓宮川。名は春暉。醫者。文人。伊勢國(三重縣)の人。文化二年(一〇六五)歿。年五十三。

筑紫の海

有明海をさす。

長崎

今の長崎市。

雲仙が嶽

長崎縣の島原半島にある。雲泉岳とも書く。

島原

雲仙嶽の東麓にあつて海に臨む。

天草

天草灘中の島。

宇土

肥後國(熊本縣)宇土郡。

八代

同國(同)八代郡。

一七 知らぬ火

橘南谿

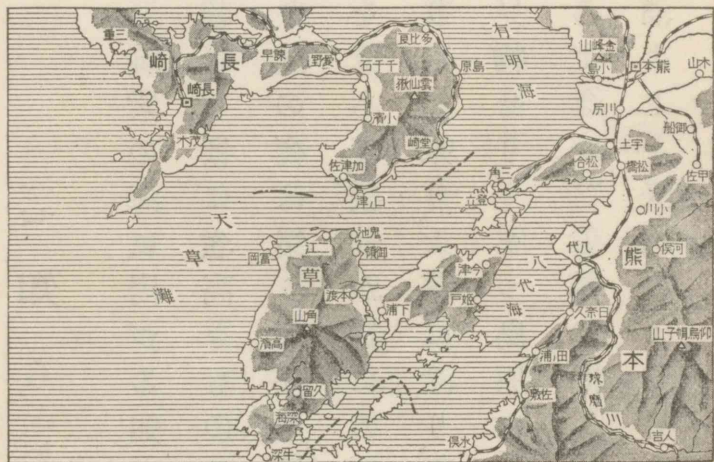
筑紫の海に出づる知らぬ火は、例年七月晦日の夜なり。昔より世に名高きものにて、今も九州の地にては、諸國より此の夜は集り來りて見る事なり。予は、益後、早く長崎を立ちて、雲仙が嶽にのぼり、それより島原に出で、城下より舟に乗り、天草に渡り、天草の惣象といへる山の峯にて見物せり。まづ島原にて、「知らぬ火見るはいづれの地よろしきか。」と尋ね問ふに、「肥後國宇土八代、松橋の邊の浦よし。又殊によく見ゆるは天草の島なり。」といふにぞ、さらば、天草に渡るべしと、便船尋ぬるに、邊土ゆゑに、便

松橋

肥後國(熊本縣)下
益城郡宇土と八代
の間にある。

知らぬ火の
しよう体

?



船もなければ、小さき獵船をか
りて渡る。此の日天氣殊にの
どやかにして、海上風靜かなれ
ば、四方の眺殊によし。雲仙が
嶽はうしろに聳え、向ふ遙かに
東南に連なりて、天草の島青み
わたりたり。此の海は、高山の
麓ゆるぎにことに深く、百五六
十尋もありとぞ。乗れる船は
獵船なれば、かゝる事もよく知
り居て語り聞かす。面白き物

三角
肥後國(熊本縣)三
角半島の西北端に
ある。

語に心慰みて、數里の海上も程近きやうに覺えて、はや天

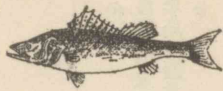


いと靜かなり。何人の住むにやとゆかしくも見る。右
の方は、波打際所廣く、砂子の清きこと、霜を置けるが如く
なれば、「いざや此處にて船しばし。」といへば、やがて渚に

草の地方に近づけり。天草の砥石
山などいふ處を右に見なし、三角と
天いふ處より、山の間船さし入れて
草行く。左右六七町に過ぎじと見え、
灘 水清く山峙ちて、風景又他に異なり。
北へくじけ、南へまがりて尋ね入る
に、縁につゞく小松の間に、藁屋の軒

鉾

形槍の如く柄の長さ三間、先は鐵でつくり三つにわかれ、彎曲して長さ一尺位、石づきのとこに長い綱をつけてある。これを投げて魚をとる。



鱈

船さしよせて、錨おろす。船頭いふは、「此の濱邊には、ちいさき蛸多し。おりたちて取り給へ。」といふに、潮は浅し、砂は清し、皆々おりて蛸見ありく。田舎には珍しからぬ事も、京都に住める身は、いと心慰めり。船頭は鉾打ちかたげつゝ、船さし行きしが、程なく二尺に近き鱸一つ、突き得て歸れり。取敢ず料理して煮る。鮮けくして味はひの美なること、更にもいはず。やゝ時移りぬれば、船さし出して急ぐに、暮近きに、天草の惣象といふ處にいたる。此の處は、少し民家ありて、多くは漁夫住めり。此の村にあがりて、知らぬ火見る處の案内を頼みしに、百姓一人心よううけがひて、いたくけがれぬ筵一枚携へ先に立つ。

熊本

今の熊本市。

日奈久

肥後國(熊本縣)葦北郡八代の南にある。

東の海の岸にさし出でたる山あり。高さ七八町もや有らん、此のあたりにての高山なるが、此の峯よろしと、筵打敷きて坐す。眞向ひに肥後國ありて、只一望につくす。宇土、熊本は少し左に見えたり。右に日奈久、向ひに八代、その間の海上、わたり五六里より七八里に過ぎず。南北は入海數十里にして、その限り見えず。案内の人指さして、右なるは鼠島なり、左は大島なり、それは三つの島、これは幾島と、數々をしふ。げに、海上三里ばかりに、いとちひさく島々見ゆ。「知らぬ火はいづれに出づるか。」と問ふに、「島々見ゆるあたり。」といふ。此處も初の程は人氣もなく、いと物凄かりしが、追々に知らぬ火見物の人々出で

來りて、數十人に及ぶ。皆此の近國より、二日路、三日路をも來りて見物する人々なり。

程なく海の表もやゝ夕煙引渡して、人顔もさだかならねば、所々松どもともし、思ひくゝに、小唄、淨瑠璃、或は謠狂言など、各藝を盡くして戯れ遊ぶ。夜陰の事なれば誰とは知れず、諸方より集りたる事なれば、遠慮はなし、彼の座に登り、此の筵に連なり、隔てなくむつび語らふ事、有馬、但馬などの温泉の場の交の如し。今年は例よりは残暑も強けれども、かゝる海邊の高山に、殊に空は快く晴れわたり、小夜風おもむろに吹きて、いと涼しければ、夜の更くるもしらず、はや夜半にもなりしかど、知らぬ火のさたなし。

有馬
攝津國(兵庫縣)有馬郡にある。
但馬の温泉
兵庫縣城崎郡にある城崎温泉をさす。

八つ
午前二時頃。
午前十時 九ツ

午後九時 九ツ
10 8 6 4 2
5 5 5 5 5
4 3 2 1
3 2 1
4 3 2 1
5 4 3 2 1

大阪の天神祭
大阪の天神宮(大阪市北區大工町にある)の祭祀をいふ。こゝは毎年七月二十五日の夜に行はれる祭のことである。

今年はじめて見る人は、今宵はいかなる事ぞ。知らぬ火は出でざるか。但しは「そらごとなりや。」など、口々にいふ。予もあやしみ居たりしが、八つ近きところに、遙か向ふに、波を離れて、赤き色の火一つ見ゆ。暫くしてその火左右にわかれて三つになるやうに見えしが、それよりおひおひに出づるほどに、海上わたり四五里ばかりが間に、百千の數を知らず。明らかなるあり、幽かなるあり、滅ゆるあり、燃ゆるあり、高きあり、低きあり、誠に甚だ見事にして、目を驚かせり。その火の色皆赤くして、提燈の火を遠くのぞむが如く、たとへば大阪の天神祭を夥しく集めて見るに異ならず。實に諸國より來り見るもいたづらなら

ず。所の人に問ふに、年によりて、多きことも少き事も定らずとぞ。今年はすぐれて多く出でたるも、予が幸といふべし。廣き海中に出づる事なれば、天草に限らず、肥後の地よりも、何れの浦にても皆よく見ゆるなり。然れどもいかなるわけにや、高山にのぼる程多く見事に見ゆるとて、此の山なども群集せるなり。此の夜は、此のあたり者、海中に龍神の燈明を出し給ふなりとて、おそれて渡海の船を禁ず。獵船といへども、此の一夜は乗る事なし。過ぎし年肥後の士ひそかに小舟に乗りて、彼の火の出づる處にいたり見るに、只その火前後に遠く有りて、我が舟近くは一つも見えざりしとぞ。予も今宵まのあたり

姚江
支那浙江省紹興府
にある。

見しかどいかなる火といふ事を知るべからず。昔の人の知らぬ火と名付け置きしも、もつともこの事と覚えし。唐土もろこしには姚江やうかうの神燈などこれに似たる事ありとぞ。さて夜明くるまでかくの如くにして、旭出づれば火の光漸に薄くなり行きて、星とともに消滅す。むかし火の前の國、火の後の國と名附けられしも、ゆゑ有ることなり。中古の世、火の字をいみて、肥前肥後と改められしとぞ。又和歌の言葉などにも、知らぬ火の筑紫など書けり。九州に遊ばん人は、必ず此の折を考へて行くべき事なり。

(西遊記)

吉村冬彦
本名は寺田寅彦。
理學博士。東京帝
國大學教授。高知
縣の人。明治十一
年生。

一八 涼み臺

吉村 冬彦

毎年夏になつて、そろ／＼夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを付ける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が、誰かの口から言ひ出される。しかし、其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々の事に紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の中にいよ／＼今日はと云ふ事になつて、朝の内に物置の屋根裏から臺が取下ろされ、一

年中の塵埃や黴が、ぬれ雑巾で丁寧^{ていねい}に拭ひ清められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ／＼夕方になつて中庭に持出されると、それで始めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

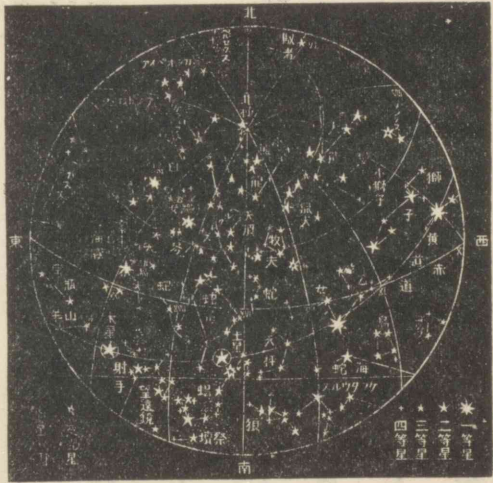
涼み臺の外に、折り疊み椅子が三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の中には、繩飛びをする者もあれば、寫生帖を出して、おばあさんの後姿をかいてゐる者もある。明朝咲く朝顔の蕾を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、縁側へ色々な花を並べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんにお國の話させたりし

てゐる。幼い子等には、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば郷里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小船で連れに來るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それでいつもお國の話をねだつては、おしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ。」と一人が云ふと、もう一人が同じ言葉を繰り返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢々出る。私自身が子供の時に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るの

さへ。

を聞いてゐると、それがもう遠い昔の出來事であつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は臃げにしか覺えてゐない子供等には、會津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないだらう。そしてそれだけに、却つて祖父に對する懐かしみは、淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿にをさめられるだらうと思はれる。今年の夏、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵の中に南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見るとそれは火星であつた。星座圖を出して來て、

其の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日附をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよくはれた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃はまだ織女や牽牛は宵の中にはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が屋根越しに氷のやうな光を投げてゐた。



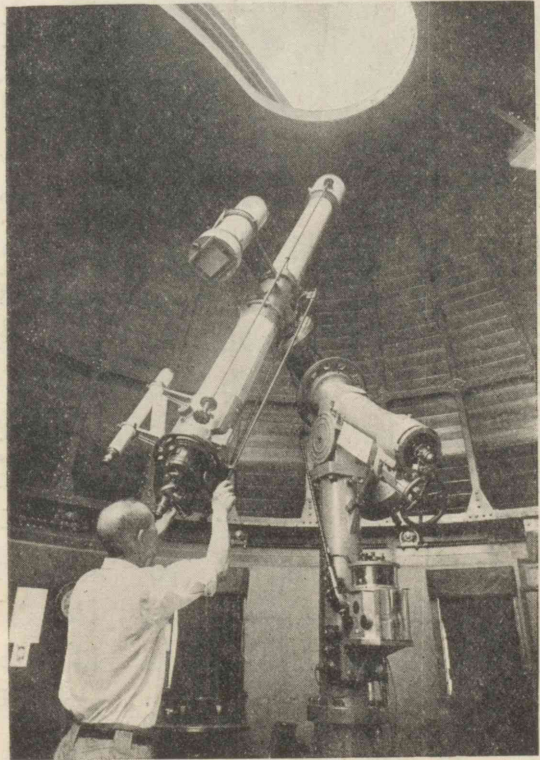
七月の星座圖

空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜中空を見張つてゐる話をして、それから新星の發見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を暗記してゐれば、素人でも新星を發見し得る機會はあるといふ事も話した。一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして、測られるやうな莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられるほど少なさうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の

盲龜云々
阿含經といふお經
にある句。逢ひが
たいことにたとへ
る。

出現はそれほど珍しいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。

こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十年の過去のものだといふ事であつた。我が家の先祖の誰かが、何處かでどうかしてゐたと同じ時刻に、遠い宇宙の片隅に突發した事



(臺象氣央中) 器 測 觀 體 天

の報知が、やつと今の世に、此の世界に届くといふ事であつた。

八月になつてから、雨天や曇天がしばらく續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。或朝新聞を見てゐると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したと云ふ記事が出てゐた。其の日の夕方に涼み臺へ出て、子供と共に其の新星を搜したら、すぐ分つた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐる事は、織女・牽牛が宵の中に眞上に來てゐるのでも知られた。そして新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争ふほどに、輝きまたゝいてゐるのであつた。

「暫く怠けたので、新星を発見しそこなつたね。」
と云つたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして面白さ
うに笑つてゐた。

其の中にまた曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がす
る。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘
れられがちになつた。従つて星の事も、もう子供の頭か
らは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を
研究すべき天文學者の仕事はこれから始るので、學者達
は每晚曇つた空を眺めて、時間を待ちあかしてゐる事
であらう。

(冬彦集)

三浦梅園

名は晉、字は安貞。
江戸時代の儒者、
經濟家、豊後國(大
分縣)の人。寛政
元年(西暦一八〇
六)年、六十七
六十七。

司馬溫公

支那宋代の政治
家、歴史家。名は
光、字は君實。元
祐元年(西暦一一
八〇)年、六十八
六十八。

罌粟



煙草



一九 誠といふ説

三浦梅園

誠とは、うそを言はざる事とのみ心得たらんは、愚かな
る事なり。或人、司馬溫公に誠に入る道を問ひければ、妄
語せざるより入るとぞ。成程、妄に語らず、うそを言はぬ
より誠の道には入るなれども、うそを言はぬばかりを誠
とは言はぬなり。偽を言はぬに對する信は小さし。偽
なきに對する誠は大なり。けしの子、煙草の實は至つて
小さき物なり、地に落せば目にもかゝらぬ様なれども、内
に一つの誠といふ物あつて、奪ふべからず、隠すべからず、
晦ますべからず、覆ふべからず。その時、到るに及びては、

芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。その子を水に腐らし、火に焼きて、芽を出さずと言ふは、その子の尤よならんや。これによりて、物の子を實と言ふは、實は即ち誠なり。一つも誠ならざる物ありて腐れたる物は生ぜず、痛みたる苗はかじく。人の誠も猶かくの如し。

昔衛の靈公といひし君、夜夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く音しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎてまた鳴りけり。靈公「誰なるべきか。」と、南子に問ひ給ひければ、「これは蘧伯玉なるべし。禮に『公門に下り、路馬に式す。』といふ事あり。忠臣と孝子とは昭々の爲に節をのべず、冥々の爲に行ひを惰らずと言へり。蘧伯

衛の靈公

衛は支那春秋時代の國。今の河南省衛輝府の地。靈公名は元。西紀前四九三年歿。在位四十二年。

蘧伯玉

名は媛。衛の人。賢大夫として知られてゐる。

公門に下り

禮記曲禮篇にある。

玉は衛の賢人なり。夜なればとて禮を廢せじ。」と言ひけり。靈公人を遣して見しめけるに、果して伯玉にてありけり。人知るまじとて欺くは妄なり。四知と言ひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る。いかでか覆ひ隠すべき。



三浦梅園

譬へば、一升の米、日々二三十粒を取らんと置かんとも、知れざるべし。然れども、久しく置く時は増し、取る時は減る。草木も朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬ様なれども、誠といふもの少しの

間斷なき故に、何時太るともなければ、次第に太るものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なくともよく薫り、美しく照ればこそ、人到りたる時も香清く、色麗しけれ。人の到るを待ちて香を放ち、色を出さんとせば、はずにあふ事あるべからず。常々心にかけて掃き拭きたらん座席と、俄に蜘蛛の網取り、柱拭きたらんとは、いかでか見紛ふべき。人平生を嗜まずして、その期に臨み偽り飾らんは、誠の俄掃除なるべし。「いつはりも人にいひてはやみなまし心のとはばいかゞ答へん。」この歌の如く、人をば欺くべけれども、心に心を省みて、いか

に今の如く誠ならざる事をばせしぞ、言ひしぞ、人をば欺くに、などて自らの心を自らは欺けるぞと答めたらんには、おのづから恥かしくなり、獨りゐても額より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、偽なき旨を起請を以て申し上ぐべし。」とありければ、「我一生偽を言ひし事なし。偽なしと申す上は、この事に限りて起請をば書くまじ。」とて、終に書かざりしこそ、勝れていみじく聞え侍れ。

人は我意のある者故に、一旦我が言ひ出しし詞は、たとひ悪しと案じ當りても、是非に言ひ募りて、我を立つるものなり。これ朽ちたる實の如し。常式の者この意あれ

ば、人に憎み疎んぜられ、人の主人、奉行、頭人などこの意あれば、人をやぶり、國をそこなふ。北條泰時政をせられける時、下總國の或地頭、領家の代官と争論あり、對決に及ぶ時、領家尤もなる道理申し立てければ、地頭手をはたとうち、泰時の方に向ひ、「あら負けや。」と言ひければ、並みあける人々一同に笑ひけり。泰時うち聞きて、「いみじくも負けける者かな。某^{それがし}代官として久しく成敗^{せいばい}しつれども、かかる事承らず。あはれ負けぬると聞ゆる人も、かなはぬまでも陳ずる習なるに、前の一通りさもと聞ゆる所、領家の御代官申さるゝ所、肝心と聞ゆるにつき、何事なく負け給へる事、返すくもいみじく聞え侍り。正直の人にて

御座ありけり。」とて、うち涙ぐみ感じ申されければ、初め笑ひつる人々は、にがりきりてぞ見えける。これにより「訴論殊更の僻事もなかりけるにこそ。」とて、負け様を感じ、六年の未進の物三年まで赦しけり。たとひ訴論負けになり、いかなる事にあはんとも、偽は言ふべからずと、我が心を欺かぬ誠故、人をもかくは感ぜしなり。

(梅園叢書)

高濱虚子
名は清。小説家。
俳人。松山市の人。
明治七年生。

二〇 蟲の音と秋草

高濱 虚子

闇の庭にはたゞ蟲の聲が聞える。少し朽ちた竹縁に腰をかけて、冷やかな沓脱石の上に素足をのせて、じつと闇の庭の面に向つてゐると、庭一面に蟲の聲がしてゐるやうに思はれる。

「あれは松蟲の聲だらうか。」

「あれはこほろぎの聲だらうか。」

「あれはいとゞの聲だらうか。」

「あれはきりぎりすの聲だらうか。」

などと、一つ／＼に蟲の聲を聞き分けようとするのは、ち

分けるやうな

やうど綾錦の絲を、これは赤、これは青、これは金、これは緑と選り分けるやうなものである。なるほど一つ／＼の聲を聞き分けようとするれば、松蟲こほろぎいとゞきりぎりすと區別はつくけれども、それ等の蟲の音は、いづれも一枚の綾錦に織り成されたやうに、たゞ全體が凜々と響いて來るのである。闇の夜であるから、確かにはわからないが、かしこにあるのであらう一叢の草の根元から、またこゝにあるのであらう一叢の草の根元から、それ等の蟲の音は湧きたつやうに響いて來る。何千何萬何十萬といふ數を量ることのできぬ數多くの蟲が、いづれも互に負けまいと音を張りあげるのであるから、可なり騒々

しい。しかしながら、「闇の涼しさ」といふやうなものがあ
るのなら、それは必ずこの蟲の音から來るものであらう。
否、秋も半ば過であるから、涼しさといふ感じは通り越し
て、うすら寒い感じである。「闇のうすら寒さ」といふやう
なものがあるのなら、それはきつとこの蟲の音から起る
のであらう。

ふと聞くと、後の床の間の壁の所に當つても蟲の音が
する。天井の方に當つても蟲の音がする。床の下に當
つても同様に蟲の音が聞える。今まで庭ばかりと思つ
てゐたのは間違であつて、自分を取圍んで四方から蟲の
音が聞えるのである。よくよく聴くと、聲高い一つの蟲

が天井の隅の方で鳴き始める。さうするとそれに負け
まいとして、同じ高音が床の下から聞える。今まで庭に
鳴いてゐた蟲の聲の中にも、一際高いのが聞え始めて、天
井や床の下の音にはりあふもののやうに見える。

じつと闇を見つめてゐると、それ等の蟲の音色が闇の
中に明らかに見えるやうな心持がする。蟲の音色が見
えるといふのは變なやうではあるが、ちんちろりと鳴
くその鳴聲は、いかにも透明な音色であつて、闇の中にそ
の音色が明らかに見えるやうな心持がする。またりん
りんと鳴く蟲の音も、同じやうに透明な音色である。そ
の音色は、明らかにこゝもとにあるぞよといふ風に響く。

すいつちよ〜といふ蟲の音も、同じ透明な響である。そのすいつちよ〜と鳴くのは、こゝですよといふ風に明らかに響く。がちや〜と格段に強く騒がしく響くのは、蟲の中のあばれものででもあるやうに、他の蟲のかはいらしくもの哀れげであるのと違つて、どことなくのさばり出るやうな感じであるが、しかしそのうちに、また一種の哀れさが見える。この大きくのさばり出る蟲の音は、外の蟲の音から比べると格段に高く、こゝに私^が鳴いてゐますといふ風に、明らかに看取せられる。さうしてそれ等の諸音が、際立つて大きいことから、つぶ〜とした小さいのに至るまで、幾百千となく錯綜して響く。

この音色のをさになり、綾になり、もつれ、ほどけ、巻き返し繰り返しするさまが手に取るやうにはつきりと聞えて来る。それが丁度、闇に目があれば、眼前に明らかに見えるやうな心持がする。沓脱石の上を足で探ると、鼻緒のとれかゝつた庭下駄がある。それをつつかけて庭に降り立つて見る。足音を立てて庭の道に降りると、此方の叢くさむらの蟲は少し音をひそめる。が、彼方の叢の蟲は平氣で鳴いてゐる。暫くそこに佇んでゐると、もう大丈夫だ。と、心を許したもののやうに、すぐまた蟲の音は高まつて来る。また二三步歩くと、その邊の叢は少しひそみ音になつて、五六歩七八歩と歩くに連れて、同じやうなことを

繰り返す。もう最前の叢の所の蟲は、平氣で高音を張りあげて鳴いてゐる。今音をひそめた蟲も、我が足音が行き過ぎると、すぐ高音になつて鳴く。最前縁に腰かけてゐる時分も、なほ床の間や、天井や、床下に鳴く蟲の音もあつて、恰も蟲の音の中にあるやうに覺えたが、今こゝに來て庭の眞中に立つて見ると、愈、蟲の音のたゞ中にあるやうな心持がする。

この時、どことなくほの白くなつて來たことに氣がつく。もうそろ／＼と下弦の月の出る頃であるから、今月白が揚る頃であらうと思ふ。さういへば、草花に置いてゐる露の玉が、少しづつ光つて來るやうな心持がする。

今まで闇の中にたゞ黒く叢のあることを知つたばかりであつたが、それが萩の叢であり、紫苑の叢であり、薄の叢であり、桔梗の叢であり、をみなへしの叢であることが、



(筆文景尾今) 圖 蟲 草 秋

漸くにしてわかりかける。萩の圓く枝垂れてゐる先が、地を摩つて暫く伸びて、ぴんとその尖のはね上つてゐる

摩
磨

様子などが、だん／＼と明らかになつて来る。秋風が来て、その叢に吹き當てると、暫くはたゆたふやうにしてゐるが、やがて二つに割れて、その風をじつとこの萩に支へてゐて、その風の力が弱ると、ざわ／＼と音がして、再び元のやうに圓く枝垂れた形に戻る。こんなこともよく見えるやうになつて来る。やがて萩の花の紅い白いいふことも、見分がつくやうになつて来る。紫苑の丈高い莖の先に、一輪づつ花をつけてゐる様子も明瞭になる。その紫苑の葉の莖の根元から伸びてゐるさまが、夜目にも力強く見える。をみなへしの黄色くもの哀れげに咲き満ちてゐるさまも見える。桔梗の花はとりつくるふ

術も知らぬもののやうに、かたくなな人の如く規則正しく花をつけてゐる。その有様も手に取るやうに見える。月はやがて我等の目に入るあたりまで登つて來た。下弦の月といつても、その弓は可なり引絞つた形である。空には一點の雲もないので、今は月光は隈なく庭の面を照らす。先に闇の中にこの庭を見つめた時の感じとすつかり違つて、今はもう庭のたゞずまひが残らず目に入るやうになつた。ふと氣がついて見ると、やはり蟲の音は盛んに聞えてゐるのであるが、どうしたものか、かく目に庭の景色を明らかに見るやうになつてからは、その蟲の音は前ほど明

らかに聞えぬやうな心持がする。萩の叢を吹く風は、その後たび／＼同じやうな姿を繰り返すのであるが、その萩の叢の風に揺られるさまが、明らかに見えれば見える程、蟲の鳴聲が「朧げ」になつて行くやうな心持がする。くつわ蟲は相變らず聲高くがちや／＼と鳴きたててゐるが、それでも明るい月の下では、哀れにか細い音に聞える。

私は再び竹縁に来て腰をおろして、庭の面を眺める。萩の叢・紫苑・桔梗をみなへしなどの叢には、一面に露が降りて、きら／＼と光つてゐるさまが、手に取るやうに見える。その露の一つ／＼に光るさまは、ちやうど最前闇の

中に蟲の音を聞いた時、その蟲の音の一つ／＼に透明な音色に見えたやうに、その露の玉はいち／＼透明に揺れ動く。蟲の音の方は今は朧げになつて、最前のやうな透明な光を見せることはできぬが、それとなり代つて、今は露の玉が一つ／＼に光つて、眼前の葉先に揺いでゐる。かの床の間や、天井や、床下に聞えてゐた蟲の音も、今はどうやら止んでしまつたやうだ。月光は少し破れた軒端から疊の上に光を落し、床の下をも明るく照らしてゐる。私は秋草におく露の玉の風に揺ぐたびに、大きなかたまりになつて、それが一つ／＼に光つてゐる光景に眼を見張つて、再び蟲の音に耳を傾けた。

(女性に據る)

相馬御風
名は昌治。文學者。
新潟縣の人。明治
十六年生。

三 雜 草

相馬 御風

小學校や、女學校や、中學校などの生徒たちの描いた花の繪を展覽會などで多く見るが、それ等の十中八九が、菊とか、ダリヤとか、朝顔とか、コスモスとか、薔薇とかいつた様な、どちらかと言へば、觀賞用といふ型にはまつた花を寫したり描いたりしたものであるのには、何時ももの足りなく感じさせられる。私たちは何もさうした種類の花を描く事その事に不満を感じずるものではないが、しかし、少くとも田舎に生活してゐる子供たちには、さうした型にはまつてゐる花より以外にも、つと／＼多く美しい

花があるべきはずの様に思はれ、その點が不満に感じられてならないのである。

特に觀賞の爲に一般的になつてゐる花の美しさは言ふまでもない。しかし、さうした種類の花の外に、わけて田舎では、山にも、野にも、背戸にも、路端にも、數限りなく美しい花が咲くのである。

そしてそれ等の多くの花は、特に注意しないまでも、田舎の子供たちの心を養ひもし、樂しませもしてゐるのである。それであるにも拘らず、彼等の大多數は、いざ美しい花の繪を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深かるべき花を除外するのである。私たちの不満

は其所にある。

「この節の若い者は、草や木の名すらろくに知らない。」
私は嘗てかうした歎聲を、ある山の村の一人の老人の口から聞いて、成程と感じ入つた事があつた。田舎に住んでゐる私たちに取つて、最も親しみのある草や木の名――それをすらも知つてゐる人の少いといふ事は、何といふ情ない事であらう。毎日自分たちの往來する路端に、春に、夏に、秋に、咲く花は随分多くある。そしてそれ等の雑多な草の花は、知らず識らずの間に私たちの心に貴い養ひを恵んでくれてゐる。しかも私たちの多くは、それ等の名前すらろくに知つてゐない。

ソロー
西紀一八一七―
八六二
アマソン
アメリカの論文
家。詩人。(西紀元
三二八三)

かの森林生活で名高いアメリカの哲人ソローは、彼の毎日往來する路端の叢で、その日々にどこで何の花が咲くかを、大概知つてゐたといふ事である。そしてエマ



ソンはその一事によつても、ソローがいかに自然を愛し、いかに自然の現象に注意深かつたかを十分知る事が出来るといつて、賞讃してゐた

といふ事である。私たちは其所までは行き得ないにしても、少くとも、毎日自分たちの往來する路傍に咲く花の美しさに心を引かれ、それ等の名前ぐらゐは知つてゐて

なづなの花



もよささうなものである。

嘗て私は芭蕉の

よく見ればなづな花咲く垣根かな

の句について、こんな事を考へた事があつた。

「よく見れば。」——かう芭蕉が言つた時、彼は確かに一種の驚きを覚えてゐたに相違ない。垣根の下土に何時となしに生えた、あのぺんく草の様な見る影もない雑草でさへ、人知れずつゝまじやかに生きてゐる。あの小さな草にさへ、春がくればかうして花が咲く。こまかな何のしなもない白い花が咲く。——思ひがけなく芭蕉がさうした自然の風物に心を引かれたのも、そしてそのうち

に無限の興趣を覺えたのも尤もである。恐らくその場合、芭蕉自らにあつても、その經驗によつて、平常の自分に、よく見ない時間の多かつた事の反省が起らないではゐなかつたであらうと同時に、「よく見る」といふ事の貴さを、彼は恐らく今更の如く驚歎せずにはゐられなかつたであらうと。

これは自然に就いてだけではない。人間に就いても同じである。

「あなた方が偉いと思つてゐる人の名を書いて御覽なさい。」かういふ先生の間に對して、十中八九の生徒たちの書く名前は大概きまつてゐる。無論さうした書物で

教へられたり、先生から教へられたりした昔や今の偉い人たちの名を記憶し、それを書くのは結構な事である。しかし、さうした定評のある偉い人たちの多くの名の中へ、一つくらゐ自分自ら偉いと實感した、自分の手近な人の名がはひつてもよきさうなものではなからうか。

私たちは、願はくは、見る影もない一莖の草に就いても、限りない自然の美と意味とを味はひたいものである。そしてそれと同じ様に、自分のつい手近にある唯の人に就いても、限りない人間の貴さを感じたいものである。

(雜草苑)

三 千 代 女

佐々政一

佐々政一
號は醒雪。文學博士。國文學者。京都の人。大正六年歿、年四十六。
額田の女王
天智・弘文・天武の御代の人。

數島の道には、古來多くの女流名家が出てゐる。額田の女王・小野小町・紫式部・和泉式部などは、いづれも斯道の名家である。けれども俳句界には、まだかやうな才媛が出てゐない。芭蕉翁以來の名人は、多く男子である。この中にあつて女流俳人を代表し、今日も世に賞讃せられてゐるのは、加賀の千代女である。

千代女は今から二百餘年前、加賀國松任といふ在方に生まれた。父は福増屋六兵衛といつて、表具師であつた。家は餘り裕かではないが、表具師であるから、自然風流の

松任
金澤市の西約十三軒。同町聖興寺に千代女の墓がある。

道にも通じてゐた。千代女はかやうな家に生まれ、かやうな父を持つたこととて、幼いながらも風雅の道に志し、殊に十七文字の俳句を好んで、小さな頭をひねつては、春花・秋月などを詠じてゐた。その頃は俳句の盛んな時代で、全国いづれの地に於ても流行を極めてをり、また有名な宗匠も少くなかつたが、松任のやうな田舎には、到底良宗匠のあるはずがない。六兵衛は勿論のこと、千代女も深くこれを残念に思つてゐた。

すると、或時名高い宗匠が、行脚のをりから、圖らずも松任に來て泊ることになつた。それは盧元坊（ロゲンボウ）といふ俳諧師である。六兵衛はかねてから盧元坊の評判を聞いて

盧元坊

美濃國（岐阜縣）の人。俳人。支考の門人。延享四年（一七六三）歿。年五十八。

ゐたので、早速その由を娘の千代女に知らせると、千代女は飛び立つばかりに喜び、盧元坊の宿を訪ねて、丁寧に教を乞うた。

盧元坊はこの日長道中をしたので、大分疲勞してゐたものの、千代女の熱心に對し無愛想もできず、承諾の旨を答へ、時節に因んだほとよぎすの題を出して、「一句作つて見よ。」と言つた。

千代女は早速作つて一句を示すと、「それではいけぬ。もう一句。」と言ふ。また一句考へて差出したが、それもだめだと取上げられぬ。千代女は一所懸命に句作に耽つたが、妙想が浮かんで來ぬ。益考へる。その中に夜も

だん／＼と更けて來た。盧元坊は晝の疲に堪へぬのか、うと／＼と眠り始めた。千代女は口惜しいとも思つたが、それもちよつとの間のこと、いよ／＼思ひを凝らして、句作に熱中してゐた。

鶏の聲が彼方此方に聞え始めて、東の空が白んで來た。やがて雀もねぐらを出て、軒端に餌をあさる頃となつた。熟睡してゐた盧元坊がふと眼を覺して見ると、昨夜來た千代女がまだ坐つたまゝである。さすがに驚いて、「お前はあのまゝ寢ずにゐたのか。」と聲をかけた。千代女はその時ちやうど句案が成つて、ほと／＼ぎすほと／＼ぎすとして明けにけり

朝顔にふるまひ
水、うれし、もらひ

東花坊

各務支考の號。美濃に生まれ、後伊勢山田に住んだ。芭蕉の門人。享保十六年(三元)歿、年六十七。

乙由

中川氏。伊勢山田の祠官。麥林舎と號し、芭蕉の弟子。元文四年(三元)歿、年六十五。

と、見事に一句を詠んだ。坊はつく／＼口ずさんで見、「いや、これは實に名吟だ。」と、始めてその句を褒め、昨夜からの無禮を謝し、「永くこの心持を忘れず勉強するやうに。」と言つて、懇に句作上の方式などをも教へたのである。その後千代女は、盧元坊の師匠の東花坊、または乙由などにも就いて學び、益、その俳名を高めた。十八歳の時良縁があつて他へ嫁いだ。まめ／＼しく働いて、よくその家を治めたが、その間にもなほ句作を忘れず、時々名吟を詠んでは、世間を驚かした。曾てその愛兒を失つた時、左の一句を詠じた。

蜻蛉つりけふはどこまで行つたやら

すでに小さな極は送つたのであるが、かはいらしい姿は
 髣髴はらわたとしてなほ眼底にある。涙の泉もかれ盡くして、た
 だうつとりと去來する蜻蛉を見つめてゐると、いつしか
 我が兒は遊びに耽つて、家路を忘れたのではないかとさ
 へ思ひ惑ふのが、實に母親の至情であらう。悲しいとも
 こひしいとも言はないところに、却つて切ない情が察せ
 られる。吟ずれば吟ずるほど、深い味はひが出る。

千代女はまた夙くその夫を失つて、たゞ一人残つた男
 の子に家を嗣がせ、今は心安いと、惜しげもなく黒髪を剃
 落して、名を素園と改め、ひたすら風雅の道を楽しんで、安
 永四年七十四歳で安らかに往生を遂げた。

安永四年
 後桃園天皇の御
 代(四三三)

五十嵐力

文學博士。早稻田
 大學教授。國文學
 者。米澤市の人。
 明治七年生。

稗田杉屏
 本名三平。

海上胤平

歌人。大正五年歿、
 年八十七。

高崎正風

歌人。明治四十五
 年歿、年七十七。

二三 牛を追ふ話

五十嵐力

老農友稗田杉屏氏の話である。

日本の古言には簡単な裡に實に奥深い眞理を含んだ
 ものがあつた。いつぞや——もう二十年にも
 なりませうか——海上胤平うながねひらといふ歌人が、高崎正風とい
 ふ人の歌を評した中に高崎氏の歌に、牛牽く云々」とあ
 つたのを答めて、

「外國は知らず、我が國では、昔から牛には『追ふ』といひ來
 つたものであるのに、『牛を牽く』といふのは落着かない
 詞遣ひだ。」といつたのがありました。當時私はそれを

見て、「歌人なんて暇つぶしに下らん事をいつて楽しんであるものだ。」と思つて馬鹿にしてゐましたが、その後十数年経つて、はつと思ひ當つたことがありますよ。それは斯ういふ譯です。

或日牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、一人の男に預けて出してやりましたが、程なく走つて来て、

「乞食橋の向ふまで行くと、牛が坐り込んで、どうしても動かなくなりました。」

といふのです。

「意氣地のない弱蟲だ。それぢや、お前が行つて手傳つてやれ。」

板橋
東京市板橋區にある。

といつて、小力のある他の男を附けてやりましたが、しばらくすると、それが又歸つて来て、

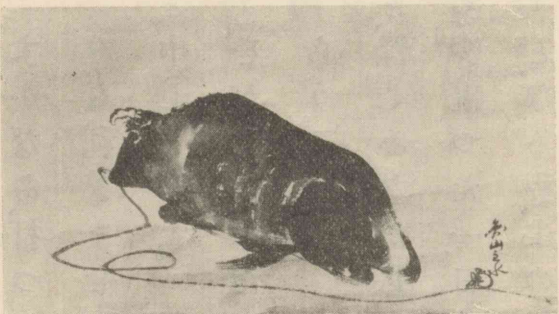
「二人でも、どうしても立ちません。」と申しました。

「馬鹿な奴だ、二人掛りで牛一匹動かせない奴があるか。それぢや五平、お前行つてやれ。」

と申しますと、五平は、

「情ない奴だな。それぢや、おれが一つ立たせてやらうか。」

などといつて、威勢よく出かけて行きましたが、しばらく



牛 (圓山應舉筆)

すると、それもまた歸つて来て、

「旦那どうしても動きませんよ。今日はどうしたんですかなあ、打つても、叩いても、引張つても、だまして、一寸も利きませんや。」

と申しました。私は、

「をかしい事だ。しかしおれが行けば、どうにかなるだらう。」

と、怪しみながら、動物に對する飼主の威光と、男どもには多少優つた一日の長とを頼みにして、急いで行つて見ますと、なる程、牛の奴が宍戸邸今の癩兵院の裏門の前に大磐石と腰を据ゑて居り、まはりには眞黒に人だかりがし

癩
廢

てゐます。それから私は三人の男に手傳はせて鞭うつたり、あやしたり、いろく工夫をして見ましたが、どうしても一寸も動かす事が出着来ません。

困りぬいて呆然として居りますと、人だかりの中に、半纏を着て股引をはいた馬方らしい六十恰好の老爺さんが居りましたが、

「旦那、それぢや動きませうまいよ。私が一つやつて見ませうか。」

といつてくれました。

「それは有難い、是非に。」

といつて、懇に頼みますと老爺さんは私の手から鼻綱を

取つて、靜かに牛の右側に立ちました。右の手に持った綱を伸して、牛の尻邊を軽く打ちながら、

「しつゝ。」

と申しますと、大磐石の牛が忽ち一身振ひして、むつくりと起き上りました。それから老爺さんは、後の方に立つて尻を打ちつゝ、二、三度圓く引廻しましたが、やがて三、四十間追つて行つて、

「さあかうして後から追つていらつしやい。もう大丈夫です。」

といつて綱を渡してくれました。

私は厚く禮を述べて別れましたが、此の時電光のやう

鳥宿池邊樹
僧推月下門
敲

に私の頭に浮かんで來たのは、例の海上氏のいはれた、牛には、「追ふ。」といふ我が古言でありました。私は一向古學に不案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらかういふ風に、祖先が幾百年の經驗を結晶させて、三四字の中に不動の眞理を疊み込んだのがあることでありませう。言葉の味はひななどといふものは、實にえらいものですね。

私は老農友の話やば、賈島が推敲の話よりも、應舉が猪の話よりも、觀世太夫が木賊刈の話よりも、フローベルが一語説よりも、更に面白く、更に興味深く思ひ、もだすにはもだされずして備忘することにした。

(八重葎)

賈島

支那唐代の詩人。

應舉

徳川時代の畫家。

觀世太夫

享保時代の能役者。

木賊刈

謠曲の名。

フローベル

佛國の小説家(西紀三三二一六八〇)。

二四 稗草の穂

北原白秋

おのづからうらさびしくぞなりにける稗草の穂のそ
よぐを見れば

北原白秋
二十六頁頭註參
照。

五

七七

七七

新しく障子張りつつ茶の花もやがて咲かなとふと思
ひたり

稗草にをりふし紅くそよめくは水引草か交りたるら
し

七七五
七七五

前田夕暮
名は洋造。歌人。
神奈川縣の人。明
治十六年生。

ひとつひとつ目につく庭の草の穂の絮毛は白しそよ
がぬぞなき

ながれ来て宙にとどまる赤蜻蛉唐黍の花の咲き揃ふ
うへを

前田夕暮

裏富士の巨きなる影野におちてゆふべはるばる秋風
のふく

行けど行けど玉蜀黍の穂の光富士あらはにも夕焼し
たり

ほのぼのと匂ひぬくとし秋草のなかをながる朝の
こぼれ湯

おくり來し菰こもづつみとけば新葱あたらのにほひしたしもふ
るさとの葱

ふるさとはつめたき土のにほひしてこほろぎのなく
うす月夜かも

秋の夜は土間におかれし泥甘どろい諸ものなかにてなけりこ
ほろぎ一つ
(原生林)

二五 國風と家風

徳富蘇峰

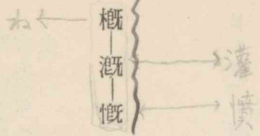
徳富蘇峰
名は猪一郎。思想
評論家。貴族院議
院。熊本縣の人。
文久三年(五三)
生。

ドーヴァー海峡
ヨーロッパ大陸と
英國との間にある
海峡。

封建時代ハルカケにありては、わづかに一川を隔て一山を離れ
ても、その人情風俗頓とんに相反するものありき。今日の歐
洲に於ては、列國の國境犬牙相交はれど、一たび境を越ゆ
れば率然ソクゼンとして別國の感を起し來る。英佛兩國がドー
ヴァーの海峡を隔つるのみにて、大は國家の政體より、小は
一家生活の狀態に至るまで、相同じからざるが如きは固
より怪しむに足らざるなり。凡そ國風は、その國の歴史
によりておのづから出で來りたるものにして、一朝一夕
に成りたるものにあらず。されば、國風は國風として、こ

これを認識するの外あるべからず。他國の風を見て濫みだりにこれを羨望センボウしたりとて、不自然なる模倣モボウは、到底永續すべきものならず。寧ろ各、その立脚地を明らかにし、善きものはこれを發達せしめ、善からざるものはこれを矯正するに若かざるなり。

家風も亦此くの如し。家は一箇の小國なり。いづれの家にも、おのづからその家風なきはあらず。而して、その家風は、概ね祖先より傳はれるものにして、一家の遺産として、これより重要なるものあるべからず。たとひ、新興の家にて、家あれば人あり、人あれば祖先あり。その源に溯り來れば、おのづから一片の歴史なきこと能はず。



歴史の流るゝ所、これ、家風の生ずる所なり。

人、國風の重んずべきことを解せば、家風の重んずべきも、亦これを解せざるべからず。しかも、動やもすれば、眼中家なく、唯當座の成り行きに任せて、傳家の遺風を悉く蹂躪し去り、徒らに新様を誇りて満足する者あるは、抑、何の心ぞや。家風なき家庭は旅舎と何ぞ擇ばん。否、旅舎ならば、旅舎としてなほ忍ぶを得べし。家庭を以て旅舎と爲すに至りては、乾燥無味も亦甚だしからずや。

國にも新國あり、家にも新家あり。新家可ならざるに非ず、たゞ新家たりとも、それ相應の家風は扶植したく思ふなり。ましてや、舊家に於て、その祖先より、連綿として

相續し來りたる家風は、苟も事に害なき限りこれを保存し、その善且美なるものは特にこれを尊重し、その子弟も亦この家風を守りて、家聲を失墜せざることを期せざるべからず。吾人は源平時代の勇士等が、自ら祖先何某の後胤と名のりて戦場に馳驅したるを見、そゞろにその心根のゆかしきを懷はざる能はざるなり。

二六 トロッコ

芥川龍之介

芥川龍之介
小説家。東京市の人。昭和二年歿年三十六。

小田原・熱海



小田原・熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始つたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を

見物に行つた。工事を——と
いつた處が、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見
介之龍川芥
に行つたのである。

土を積んだ後に佇んでゐる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて來る。煽るやうに車臺が動い

たり、土工の半纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたいと思ふ事もある。トロッコは村外れの平地へ來ると、自然と其處にとまつてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し——もと來た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。

或夕方——それは二月の初旬だつた。良平は二つ下

の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつた儘、薄明るい中に並んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る／＼、一番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり／＼、——トロッコはさういふ音と共に、三人の手に押されながら、そろ／＼線路を登つて行つた。

その内に彼は十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力ではいくら押しても、動かなく

なつた。どうかすると、車と一しよに押戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に相圖をした。

「さあ、乗らう！」

彼等は一度手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗つた。

トロッコは最初徐に、それから見る／＼勢よく、一息に線路を下り出した。その途端に、つき當りの風景は忽ち兩側に分れるやうに、ずん／＼目の前へ展開して来る。顔に當る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動搖——良平は殆ど有頂天になつた。

しかしトロッコは二三分の後、もとの終點に止つてゐた。

「さあ、もう一度押すんだ。」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押上げにかかつた。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならず、それは聞え出したと思ふと、急にかう云ふどなり聲に變つた。

「この野郎！誰に斷つてトロッコに觸つた！」

其處には古い印半纏に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、脊の高い土工が佇んでゐる。——さう云ふ姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一しよに、五六間も逃げ出してゐた。——それきり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗つて見ようと思つた

事はなかつた。唯その時の土工の姿は、何時までも良平の頭の何處かにはつきり記憶に残つてゐた。

その後十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過の工事場に佇みながら、トロッコの來るのを眺めてゐた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。このトロッコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやうな氣がした。

「この人たちならば叱られない。」——彼はさう思ひながら、トロッコの側へ驅けて行つた。

をぢさん

「をぢさん。押してやらうか？」

その中の一人——縞のシャツを着てゐる男は、俯向きにトロッコを押した儘、思つた通り快い返事をした。

「お、押してくれ。」

良平は二人の間にはひると、力一杯押始めた。

「お前は中々力があるな。」

他の一人——耳に巻煙草を挟んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だん／＼樂になり始めた。「もう押さなくとも好い。」——良平は今にもいはれるかと内心氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よ

りも腰を起したぎり、黙々と車を押續けてゐた。良平はたうとう堪へ切れずに、怯づく／＼こんな事を尋ねて見た。

「何時までも押してゐて好い？」

「好いとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思つた。

五六丁餘り押續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黄色い實がいくつも日を受けてゐる。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから。」

——良平はそんなことを考へながら、全身でトロッコを押

すやうにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになつた。縞のシャツを着てゐる男は、良平に「おい乗れ。」といつた。

良平はすぐに飛び乗つた。トロッコは三人が乗移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた迂りに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずつと好い。」——良平は羽織に風を孕ませながら、當り前の事を考へた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乗る所が多い。」——さうも考へたりした。

竹藪のある所へ來ると、トロッコは靜かに走るのを止めた。三人は又前のやうに、重いトロッコを押始めた。竹藪

は何時か雑木林になつた。爪先上りの處々には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖のむかふに、廣々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來すぎた事が急にはつきりと感じられた。三人は又トロッコへ乗つた。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきやうに、面白い氣持にはなれなかつた。「もう歸つてくれれば好い。」彼はさうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も歸れない事は、勿論彼にもわかり切つてゐた。

その次に車のとまつたのは、切り崩した山を背負つてゐる藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはひると、乳呑兒をおぶつたおかみさんを相手に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は獨りいら／＼しながら、トロッコのまはりをまはつて見た。トロッコには岩乗な車臺の板に、跳ねかへつた泥が乾いてゐた。

少時の後、茶店を出て來しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は(その時はもう挟んでゐなかつたが)、トロッコの側にある良平に新聞紙に包んだ駄菓子^{ダ菓子}をくれた。良平は冷淡に「有難う。」といつた。が、すぐに冷淡にしては相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取繕ふやうに、包

み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみてゐた。

三人はトロッコを押しながら、緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。

その坂をむかふへ下り切ると、同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロッコに腰をかけながら、歸る事ばかり氣にしてゐた。茶店の前には、花のさいた梅に西日の光が消えかゝつてゐる。「もう日が暮れる。」彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうん／＼それを押して見たり、

——そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

處が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無雜作に彼にかういつた。

「お前はもう歸んな、おれたちは今日はむかふ泊りだから。」

「あんまり歸りが遅くなると、お前の家でも心配するから。」

良平は一瞬間あつけにとられた。もう彼は是暗くなる事、去年の暮、母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人歩いて歸らなければならぬ事、——さういふ事が一時にわかつたのである。

良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に取つて附けたやうな御辭儀をすると、どん／＼線路傳ひに走り出した。

良平は少時無我夢中に線路の側を走り續けた。その内に懐の菓子包みが邪魔になる事に氣がついたから、それを路側へ抛り出すついでに、板草履も其處へ脱ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へ、ぢかに小石が食ひこんだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駆け登つた。時々涙がこみ上げて來ると、自然に顔が歪んで來る。それは無理に我慢し

せ
る。

ても、鼻だけは絶えずく／＼鳴つた。

竹藪の側を駆けぬけると、夕焼のした日金山の空も、もうほてりが消えかゝつてゐた。良平は愈氣が氣でなかつた。往きと返りと變るせるか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駆けつゞけたなり、羽織を路ばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑に來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば——」良平はさう思ひながら、這つても、つまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良

平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時も、べそはかいたが、たうとう泣かずに駆けつづけた。

彼の村へはひつて見ると、もう兩側の家々には電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて来る男衆は、良平が喘ぎ／＼走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの、床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

かれの家の門口へ駆けこんだ時、良平はたうとう大聲に、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣聲は

彼の周圍へ一時に父や母を集らせた。殊に母は何とかいひながら、良平の體を抱へるやうにした。が、良平は手足をもがきながら、啜り上げ／＼泣きつづけた。その聲が餘り激しかつたせゐるか、近所の女衆も、三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口々に彼の泣く譯を尋ねた。しかし彼は何といはれても、泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を驅通して來た。今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣きつづけても、足りない氣もちに迫られながら――。

(芥川龍之介全集)

女子新國語讀本 卷三終

女子新國語讀本 卷三終 (Faint text of the book's content)

新女國文(三)

昭和八年八月十二日印刷
昭和八年八月十六日發行
昭和九年一月十三日修正再版印刷
昭和九年一月十七日修正再版發行

女子新國語讀本

定價 卷一——卷七 各金六十錢
卷八——卷十 各金五十八錢

編者 安藤正次
編者 東條操

印刷者兼發行者 株式會社三省堂
代表者 龜井寅雄

印刷所 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
株式會社三省堂蒲田工場



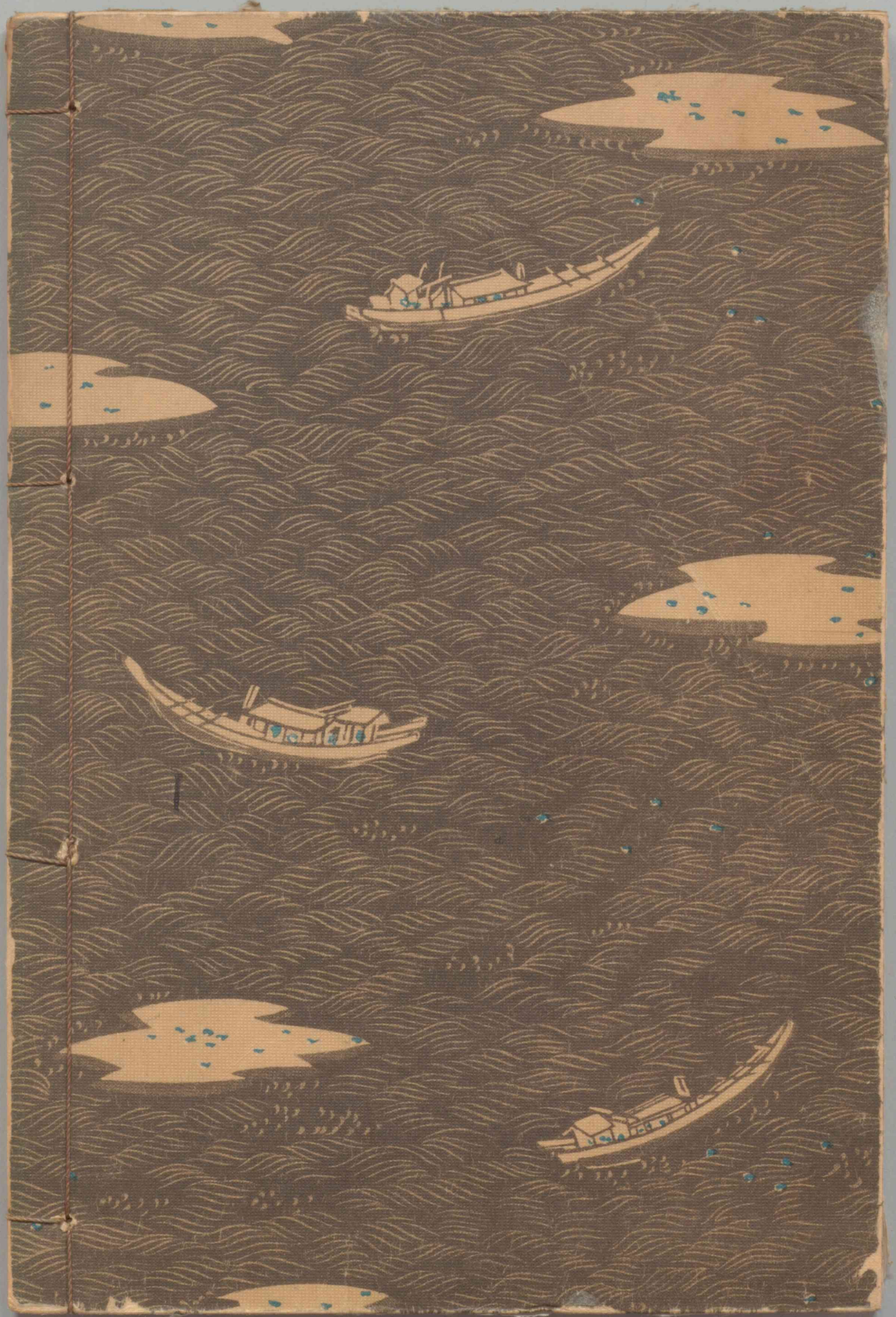
版權所有

發行所

東京市神田區神保町一丁目一五番地 株式會社三省堂
大阪府西區阿波座下通二丁目六番地 株式會社三省堂大阪支店

網崎

年次	月	日	事項	備考
明治	一	一
明治	二	一
明治	三	一
明治	四	一
明治	五	一
明治	六	一
明治	七	一
明治	八	一
明治	九	一
明治	十	一
明治	十一	一
明治	十二	一



ケイベンテツドラフセツ、
ハンテン。スソ、シユシユン、
カレコレ、コウバイ、オシモドス、
オドル、ドウヨウ、ヨウテシ、
サワる、ウヰウラホ、セ、
ヒルスギ、イチリヨウ、シカる、
シマ、ウツムク、チカライツパイオス。
マキタハコ、ホめる、モクモク、
バケル、タへる、オブ、ミカンバケ、
まず、タケヤブ、ソウフバヤシ、
チノミゴ、ユウク、ガシヨウ、
レイタン、トリツクハラ、ニホイ、

アフる、
アカル

ケイシヤ、ケる、イツシユンカン、オシギ、
シハシ、ムカハユウ、シヤマ、イタゾウリ、
~~イタゾウリ~~、ユガム、ガマン、イヨク
ザツカヤ、ワケ、

P.1
（オム）（涼み）

- （ジンアイ）
 - （カビ）（ザフキン）
 - （ツボミ）（おトギ）
 - （フジギ）（カゲンゾラ）
 - （アヒル）（オボロゲ）
 - （ツイセキ）（ケンチウセイ）
 - （シロラト）（ハクタイ）
 - （ガラゼン）（セツキン）
 - （モロキ）（ラキエラ）
- 十九歳といふ説
- （オロカ）（シバランコウ）
 - （マロゴ）（イツワリ）
 - （ラバフ）（カクサ）

P.2

- （クテます）（オソシ）
 - （下ボならん）（クサラシ）
 - （ナホ）（ハルカ）（トドロク）
 - （ゲツカ）（キヨハクギヨク）
 - （ロバ）（メイク）（アザムク）
 - （カヲリ）（イロワルワレ）
 - （シツカ）（クモ）（イトリ）
 - （ハシチフキ）（ウシナます）
 - （コワムる）（キシヨウ）
 - （ツノる）（クナチたる）
 - （ラトんせらる）（セイバイ）
 - （ヒカゴト）
- 三、蟲の音と秋草
- （ヤミ）（クツマイシ）（アヤシ）
 - （シキ）（レンリン）（ヒビク）

P.3

- （シラゾラレシ）（トトラメイ）
 - （サクソウ）（ハナヨ）（アタカモ）
 - （カゲン）（ハギ）（ミオシ）
 - （ヒキヤラ）（ヒキシボる）
 - （ツユ）
 - （バラ）（カッター）
- 二、雑草